

小田原史談

第243号

発行所 小田原史談会
小田原市東町 1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

《講演録》

大老堀田正俊刺殺の真相(上)

東海大学非常勤講師 下重 清

綱吉政権と「天和の治」

今日は江戸時代の一七世紀末、貞享元年(一六八四)、綱吉政権の時、大老堀田正俊が殺された事件に小田原藩主も関わりがあるということ、そのことも含めて、事件の真相についてお話ししたいと思います。

五代将軍である綱吉は、延宝八年(二六八〇)五月八日に四代将軍家綱が亡くなって将軍になります。家綱には男の子がいま



ませんでしたので、弟の綱吉が將軍になります。家康・秀忠、秀忠一家光、家光一家綱と、それまでは嫡系ですつと来ていたわけで、それには家康の考えがあったと思われま。しかし、今回は嫡系で継がないということ、弟になりました。

その当時の幕閣は、大老が下馬將軍ともいわれた酒井忠清、それから大政参与という大老に次ぐ役職にいたのが、小田原藩主稲葉正則でした。他に、大久保忠朝・土井利房・堀田正俊と老中が三人いました。この中の大久保忠朝は、後に小田原藩主となります。

將軍家綱が危篤となり、さて次の將軍は誰になっていたかということ、幕閣の中で策略

を巡らすわけです。そこで出たのが、有栖川宮幸仁親王(東福門院が父良仁親王の准母)を中継ぎで將軍にしようという案でありました。その年の初めに、京の朝廷から將軍へ年頭の挨拶をする目的で、公家衆とともに有栖川宮親王が勅使として江戸に来ていたのです。ですから、この幸仁親王というのは、生前の將軍家綱だけでなく、幕閣の面々にも会って来ました。そういうこともあって、彼に中継ぎをさせようという話が出ました。なぜ宮將軍が浮上してきたかといいますが、当時家綱の側室が懐妊しており、もしも男子が生まれたら徳川家の嫡系であります。その子が成長した時に退けやすい將軍ということ、鎌倉時代の例に倣って中継ぎ案も議論されたのです。当然、弟の綱吉も候補でしたが、幕閣の中では、將軍としての器量がいまいち無いと思われていたようでありま

す。そういった中、家綱が亡くなる直前、江戸城に詰めていた老中堀田正俊が、弟の綱吉はどうですかと將軍家綱に進言し、納得させたようです。その結果、將軍家綱みずからが、綱吉を自分の養子とする形で、次の將軍に指名しました。側室は流産しますが、流産したから家綱が決意したのか、決意したから流し

二百四十三号(平成二十七年十月号)

目次

《講演録》
大老堀田正俊刺殺の真相(上) 下重清 1

旅のつれづれ俳句日記 劍持芳枝 5

「花燃ゆ」の 楫取素彦(小田村伊之助)と小田原 石井敬士 6

箱根神社境内に建つ吉田松陰の和歌碑 直江 博子 10

五十嵐写真館百二十年の記憶 話し手 五十嵐 史郎さん 12

新会員紹介 17

小田原の郷土史再発見 明治二年大久保家の寺院寄進と 忠隣妾腹の子・上柳彦兵衛 石井 啓文 18

小田原桐座について(三) 由緒書の検討を中心に 荒河 純 22

「片岡日記」昭和編(四) 片岡 永左衛門 26

小田原の街角写真今昔⑤ 植田 士郎 29

史談会セミナー報告及び予告 30

史跡巡り案内 別所温泉・塩田平方面 中條 利昭 31

小田原城の総構を歩く 特別賛助会員・落穂集 32

たのかは分かりません。いづれにしても、こうして將軍綱吉誕生のために働いた堀田正俊が、のちに綱吉にとっても頼りにされていきます。

翌天和元年(一六八二)、それまで大老であった酒井忠清が解任されます。大政参与の稲葉正則も引退し、それと引き替りに、老中の中では一番若かった堀田正俊が大老に昇進します。これは明らかに、將軍綱吉による「お取り立て」であります。

この他の新たな老中として、阿部正武・戸田忠昌が幕閣に入ってきました。稲葉正則は引退しましたが、子の正通(まさみち)はその頃すでに京都所司代でした。それから、大久保忠朝の息子忠増も若年寄で、幕閣に入ってきておられますし、のち事件を引き起こす稲葉正休も若年寄になっております。このように天和年間になると幕閣が代替わりするのですが、それは人事の刷新というより、四代將軍家綱の時代からの自然な流れにそった人事異動と言っていると思います。

堀田正俊が大老になったお陰で、姻戚関係にあった稲葉家も幕閣の中でより重要な地位を占めるようになったわけです。

稲葉家と堀田家の関係を示すために系図を挙げました(図1)。稲葉正則の祖父である稲葉正成

(後室がお福、のちの春日局)は、稲葉正休の祖父でもあり、堀田正俊の父である堀田正盛の祖父もまた稲葉正成であるという親戚関係にありました。加えて、稲葉正則の長女お方は堀田正俊に嫁いでいますから、両家は元々親戚であっただけでなく、この代でも姻戚関係にあり、きわめて密接な大名同士であったといえます。

その辺りのことを示す稲葉正則の手紙(天和二年四月十三日付)が残っています(京都府立総合資料館蔵田辺家文書)。

(略)筑前守一家お陰候ては、当御代に成りて、一門ども十四人お役替へ仰せ付けられ候かと覚え申し候。有り難き事どもに候。

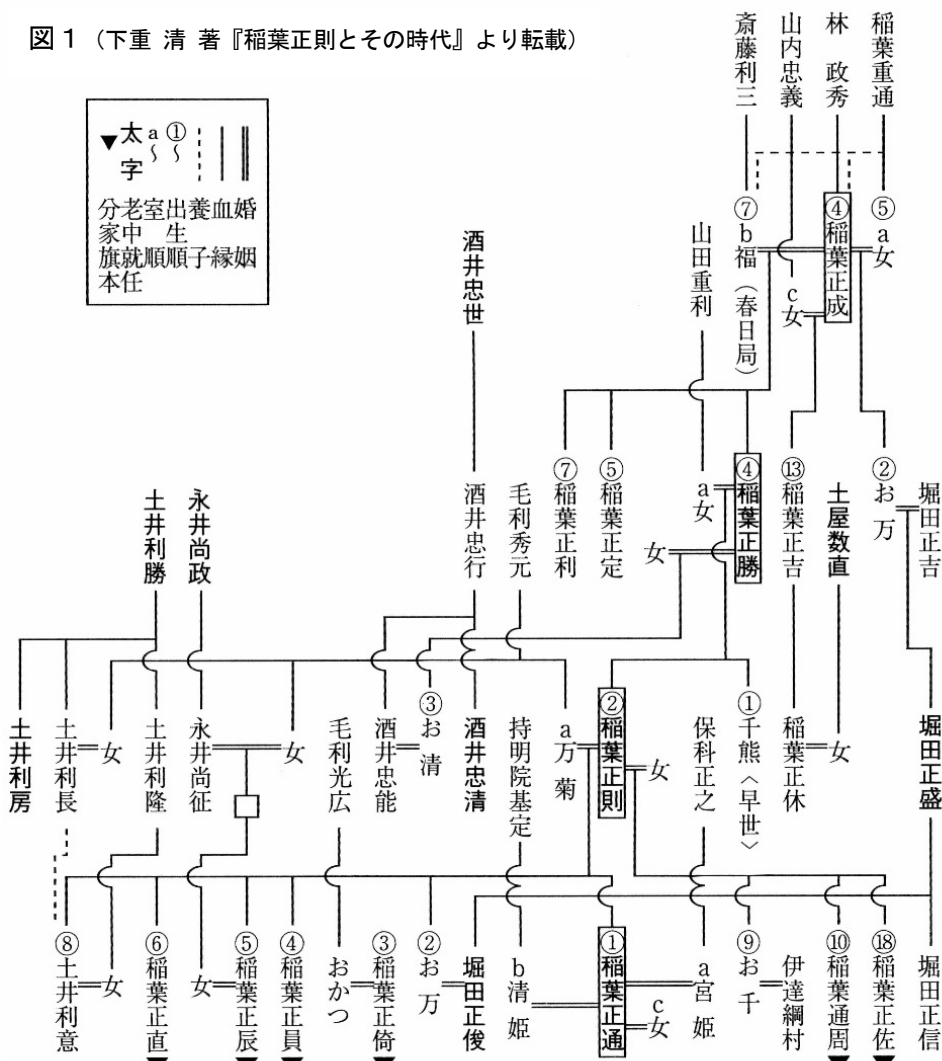
これは、田辺権大夫という稲葉家の筆頭家老に宛てたものです。つまり、綱吉の時代になつて、筑前守すなわち大老堀田正

俊のお陰で、稲葉家一門は十四人も新しい役職に就いたり昇進したりで、とても喜ばしいと書いております。

この天和年間の四年弱を政治史では「天和の治」と呼んでいきます。しかし、実際にはあまり新しいことはやっていません。

むしろ、その後の貞享・元禄時代になつて、教科書にも出てくるような政策、生類憐れみの令などを綱吉はやるようになっていきます。側用人の柳沢吉保を使って、かなり好き放題の政治をやることになるわけですが、それらはすべて次の事件より後

図1 (下重 清 著『稲葉正則とその時代』より転載)



Legend for the genealogical chart:
- Thick line: 太字 (Main line)
- Dashed line: ① (Adoptive)
- Dotted line: ② (Marriage)
- Vertical line: ③ (Blood relation)
- Horizontal line: ④ (Marriage)
- Boxed text: 分家 (Branch family), 老中 (Senior official), 室生 (Room-born), 出順 (Succession), 養順 (Adoptive succession), 血縁 (Blood relation), 婚姻 (Marriage)

のことになります。

殿中での大老刺殺事件の概要

まず、事件の概要についてお話しします。

大老堀田正俊を、若年寄であった稲葉正休が江戸城の中で刺殺したという事件です。今で言うところ、国会の本会議が始まる直前、閣僚の控室から国土交通大臣が総理大臣を廊下呼び出して、ブスツと刺し殺したという事件です。あの赤穂事件の刃傷沙汰は、先輩国会議員が若手議員に嫌みを言い、喧嘩になり、ちよつと傷つけられた程度のもので、それと比べると、重大な事件であったかが分かります。ですが、いろいろな研究を讀んでみても、この事件の真相・原因は不明、何故そんなことをやったのかは謎だ、と書いているものが多いようです。

この事件に関する記録『藩鑑』巻六十三「稲葉」を讀みながら、当時の人びとが事件をどのようにとらえていたのか見ていきたいと思います。

一、稲葉石見守(正休)、殿中において堀田筑前守(正俊)を殺害あり。その始終を聞くに、……御礼日故、諸大名・諸役人登城、御礼始まるべき少し前にて、筑前守殿、その他御老中残らず

御揃い着座の時、石見守殿、筑前守(「少し御意得たく候」とて呼び立て、桜の間の縁側へ石見守先達つて行き、筑前守座し給い、「何事にや」と言う処を、用ありそうに側へ寄り、「別儀にても候わず、御為に候」といながら、一尺三寸の脇差兼房打ちの荒身段平物をもって胸の辺りを突き通し、後ろの杉戸へぎしと押し付け給う。筑前守あおのきに返りながら、「石見乱心か」と宣いければ、「何の乱心成らん、御為に候」とて、えぐり給う。惣御老中の御座所より見ゆる所故、その儘大久保加賀守忠朝・戸田山城守忠昌・阿部豊後守正武、何れも走り寄り、石見守殿を後ろより斬り付け給う。初太刀は加賀守殿の由。しかるに石見守殿、振り返り見て、苦笑いし、少しも動かさず、いよいよ筑前守殿を刺し通し、抱きすくめながら果て給いぬ。……

御礼日とは、月末二十八日定例の諸大名らの將軍へのお目見えのことですが、この場合、貞享元年八月二十八日に当たります。座る直前の大老を、いきなり脇差でもって脇から肩へ抜けるようにブスツと刺して、そのまま後ろの杉戸へ突き刺し、グイグイとやったわけですね。ここ

で正休が「御為」といったのは、將軍の御為ということしかありません。また、大久保忠朝が最初に斬りつけたと書かれていますが、これには諸説あります。同じように後に書かれたものに、「御当代記」があります。事件の大筋はほぼ同じですが、細部では少しずつ違っています。稲葉正休に対する初太刀はやはり大久保忠朝となっていて、勝という將軍の御側付の者だともあります。また、堀田正俊はまだ息があり、駕籠に乗って江戸城の不浄門といわれた平河門から出て、遠廻りして下馬前の堀田屋敷へ帰ったといっています。この時、嫡子の堀田正伸も登城していたのですが、腰が抜けてしまったので瀕死の親正俊と一緒にの駕籠に乗って屋敷に戻ったとあります。また、弟堀田正英の息子正親は、殿中で気絶したとあります。

整理してみますと、貞享元年八月二十八日、月次(つきなみ)の將軍への御礼日に、お目見え直前に起こった事件でした。若年寄の稲葉正休が、大老堀田正俊を呼び出し、場を移して自分の脇差で正俊を刺しました。その騒ぎを近くに居た老中ら幕閣が聞きつけ、今まさに突き立て

ている正休に離せといっても離さないで、後ろから皆で寄りつたかたて斬りつけたということになります。

事件の動機 ―書き置き二通―

この事件の原因については、公式には稲葉正休の乱心ということでは、逆上・狂気による咄嗟の犯行のことです。若年寄が乱心して咄嗟に大老を刺したので、引き離すために皆で斬りかかり、老中ら立ち合いのなか事は済んだと將軍には報告され、御礼は中止となりました。

乱心による犯行と意味合いが逆なのは、覚悟の犯行です。恨みや遺恨があつて、最初から予定して仕組んだ計画的な犯行のことです。この事件は、実は、ある意味で覚悟した犯行だったわけですが、乱心という形で決着していくことになりました。

覚悟の上の犯行を示す証拠として、稲葉正休は書き置きを二通残していたと言われています(『藩鑑』)。一通は稲葉正休の懐中、もう一通は、登城前に自分の屋敷で家中の者に書き置きしたものでした。

まず、正休自身の懐中にあつた一通目には、將軍に対する御恩に報いるために大老を殺すんだ、と書かれていたといえます。

つまり、正休の父稲葉正吉(まさよし)が、明暦二年(一六五六)、駿府城の城番として家来を伴って赴任していた時のことです。

駿府城で家来が衆道、いわゆる男色関係になっていたため、それを正吉が注意したところ、逆に咎められた家臣によって城内で殺されるという事件が起きました。その時、いここにあたる小田原藩主稲葉正則が立ち回って、取り潰しにならないように、家督は嫡男正休(十三歳)に継がせることとなり、家が存続したということがありました。それが前將軍家綱による御恩に当たります。

綱吉の時代になると、正休は出世し、知行を増されて一万石を超え、旗本から大名となり、さらに若年寄という重要なポストに登用されます。これも御恩で、それら御恩に報いるために今回大老を殺すのだと言っているわけです。こちらの書き置きは老中がその場で取り上げ、おそらく將軍綱吉にも見せた可能性があります。

もう一通の書き置きには、自分の家臣に宛てて、万民のために私は今大老を殺すのだから嘆かないで、心配するなというようなことが書いてあったといえます。

この事件に関して世間では、

さまざまに取り沙汰がなされ、その原因をめぐっているいろいろな説が出てきます。大方は若年寄稲葉正休に肩入れする、そういった評判が多かったようです。その一つが先に引用した『御当代記』にあります。内容を要約すると次のようになります。

堀田正俊は將軍の覚えがめでたいので、かなり好き放題に大老として権力を振るっている。そのことに対して周りの者はなかなか注意できないで、黙っている状況にあったといえます。

たとえば、郊外に屋敷を構え、そこに侍や坊主、坊主といつても僧侶ではありませんが、気心の知れた者を集めて、ドンチャン騒ぎをやっている。去る四月十七日、家康命日の精進日であるというのに、約束があるといつて品川に出かけて行って、芝浦で網を下ろして魚を捕り、それを料理して酒を呑む。品川宿より遊女(飯盛女)を呼んで給仕をさせる、というような傍若無人の行いをしていたといえます。このように世間は殺人を犯した稲葉正休よりも、大老の方が悪人だととらえています。判官鼻根といつてもいいでしょう。殺人犯の正休の方に世間は肩入れしていきまます。

また、こうした取り沙汰とは別に、この事件に関しては幕閣

に対する批判もあがったようです。『藩鑑』によれば、御三家尾張藩の徳川光友が、何故そのようなことをしたのか問い質すためにも、その場で無抵抗の正休を斬り殺したという行為は幕閣の越度ではないかといっています。

これと同様のことが『徳川実紀』にも書かれていて、そこらでは水戸の御老公光圀が、後ろから斬り殺すのではなく、まずは引き離し取り押さえて、何故そういう行為に及んだかを聞かなくてはならない。それを居並ぶ老中が寄つてたかつて切りつけて、その場で殺してしまったのはどういうことだ、と問題にしています。

そのような幕閣に対する批判もあつたのですが、結果的に何のお咎めも無しでした。ただ、その後、江戸城内や、しかるべき所へは、正休が何故犯行に及んだのかとか、この事件についてもこれ以上詮索だとか批判をするな、という貼り紙が出されたといえます(十月十一日付畑七郎左衛門書状・京都府立総合資料館蔵田辺家文書)。まあ、世間の方ではそんなことは知りませんから、いろいろ取り沙汰するわけです。

新説登場 — 黒幕は將軍? —

どうしてこういう事件が起き

たかということについて、新しい説がつい昨年出ました。

小川和也さんという研究者が書かれた『儒学殺人事件』(講談社)という本です。大変売れた本です。小川和也さんは江戸時代の思想史を専門とされている方で、彼は本の中で、この殿中での殺人事件を取り上げ、新説を提起されました。

小川さんがもとにしたのは、堀田正俊が、死の前年、天和三年に書いた「颯言録(ようげんろく)」という本であります。この「颯言録」という本では、その時の將軍である綱吉と「天和の治」を褒め称えており、儒学に造詣の深い正俊という人間像も見えてくるそうです。ただ、前將軍家綱は名君だったが、綱吉は名君というにはいまだ至っていないので、是非とも綱吉にも仁政を期待し、名君になつて欲しいというようなことが書いてあるといえます。

また、堀田正俊の側近だった磯谷という者が事件から七十年後に書いた記録をもとに、この事件は、そもそも堀田と將軍との間の確執に起因しているといっています。

その頃、綱吉の側近には大老堀田正俊と側用人の牧野成貞がいました。この牧野成貞は綱吉が將軍になる前、館林藩主だった頃の筆頭家老で、そのまま側

用人として江戸城に入ってきた人物であります。柳沢吉保が台頭してくる前に綱吉が一番頼りにしていた家臣、初代の側用人であったわけです。この二人、つまり大老堀田正俊と側用人牧野成貞くらいしか、綱吉に対して注意したり、諫めることができなかつたといえます。老中であつても、他の幕閣は將軍に対してイエス・マンだったようです。とくに大老堀田正俊は、たびたび將軍のやることに對して注意をしたそうです。將軍としては面白くないわけです。小川さんというには、綱吉と口うるさい大老正俊との間の確執によって、將軍から次第に疎まれるようになった大老を、將軍が手を回して殺させたその手を回した相手が稲葉正休であつたというわけです。新見解です。

その前に、將軍が堀田正俊に對して、お前は嫌いだからもう大老を辞めなさい。大老辞めて息子に家督を譲りなさい、といったといえます。これが普通の江戸時代の大名であつたならば、答えは一つ「はい」しかないのですが、正俊は「いいえ」と答えたらしいんです。これがまた、將軍としてはカチンと来るわけです。將軍の命令に對して「いいえ」といったのですからね。そこで、裏から手を回して大老を殺させた、というふう

に小川さんは書いています。しかし、綱吉が堀田正俊をクビにしようとしたと書いてある史料や言説は、これまで見つかつていません。

また、それではなぜ、殺させる相手が若年寄の稲葉正休だったのかということもです。他のもつと下つ端の者でもないわけで、この一番肝心な点も一切説明されていません。

新説が出されたわけですが、読んだ限り傍証史料も無く、ほとんどが推測の域を出ていません。小川さんは専門である儒学とか、思想史に引き付けて新説を提示されましたが、歴史学をやっている私などから見るとどうも辻褄が合っていない、大事なところの証明が抜け落ちていいると思うわけです。

私は、すでにこの事件についていくつかの史料を使って自説を発表したことがあります(幕閣譜代藩の政治構造 岩田書院、二〇〇六年)。そこで使った史料というのは、すでに活字化されているものも含め、誰でも見ようと思えば見ることができ、少し調べれば行き当たる史料です。残念ながら小川さんは、それらの史料を一つも使用されておられません。

(つづく)

平成二十七年年度小田原史談会

総会講演録

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝

小田原史談会の史跡めぐりの旅は何年も前からよく参加させていただき楽しい旅が多かつた。今回も大分昔の頃になってしまったが、忘れられない旅であつた。それは十一月の晩秋の頃であつた。二十二人参加でマイクロバスだった。七時小田原出発し、富士川サーブスエリア、東郷パーキングで休憩、此処でお弁当が積みこまれ名古屋辺りでいただいた。松阪市に着き、城跡や本居宣長旧宅(鈴の屋)など見学、国学の研究に没頭した宣長の心を少しばかり知ることが出来た。三井家発祥の地はバスが通れないので素通りだった。東名阪道路より伊勢道路を西へ伊勢神宮に着いた。宇治橋を渡り内宮参拝へ。何時来ても心が清められるような気がした。参拝をすませ有名な赤福の店の横から始まるおかげ横町を散策した。昔ながらの店が並び家の造りは江戸時代さながらで楽しく見物出来た。四時前には鳥羽へ向かつた。今夜の宿は鳥羽ビューホテル花真珠、玄関のかがり火が私達を迎えてくれた。若女将も挨拶に見えた。それぞれ自己紹介もあり楽しい旅の一夜だった。

鳥羽の朝は少し曇っていた。朝食の時昨日撮った写真がもう出来ていた。八時出発の時従業員の人達がわざわざバスの中に来てお礼の挨拶をして下さつた。東名阪道路を経て伊賀上野へ、上野城址の石垣が日本一高いと言われるだけあつて素晴らしかつた。此所へ来るとずい分寒かつた。五層の天守閣にも登つた。格天井が素晴らしく見事かつた。芭蕉記念館、伊賀忍者博物館で忍者に扮した男女の姿が面白かつた。芭蕉の旅姿を形どつた俳聖殿はよく写真などで見ていたが直接目の前で見ることが出来て感激した。

かりがねや俳聖殿の開かずの戸

山茶花や忍者屋敷の杉板戸

俳聖殿をバックに写真を撮ってもらつた。和菓子屋さんで上品なお菓子を買い、お茶をご馳走になりその小さなお茶碗をおみやげにいただいた。バスが長いこと駐車出来ずちよつと慌ただしかつた。お昼は上野市内のパーキングエリアでいただいた。此所が最後に名古屋高速より一路小田原へと帰つたのである。二日間晩秋の旅の本当に有意義で楽しかつたことを感謝せずにはいられない。

「花燃ゆ」の

楫取素彦(小田村伊之助)と小田原

石井 敬士 たかし

はじめに

現在、NHK日曜の大河ドラマで「花燃ゆ」が放映中であるが、吉田松陰と松下村塾、そしてその塾生たちの幕末を生きた青春群像が、松陰の妹、杉文を中心として、女性側から見たドラマとして描かれている。楫取素彦(かとり・もとひこ)はドラマでは小田村伊之助として登場するが、松陰より一才年上で、絶えず松陰を支える存在であった。

本稿では、この小田村伊之助すなわち楫取素彦とは、どんな人物であったのか、そして小田原との縁について述べてみたい。

楫取素彦とは

楫取素彦は文政十二年(一八二九)長州藩医、松島瑞蟠の次男として萩城下に生まれている。天保十一年(一八四〇)儒者、小田村家の養嗣子となつて、家業を継ぎ、嘉永六年(一八五三)吉田松陰の妹、杉寿と結婚、安政四年(一八五七)藩校明倫館の講師となつた。松陰が安政五年(一八五八)

野山獄に投獄された後の松下村塾を託されるが、その頃の素彦(小田村伊之助)は藩主毛利敬親の側近で動きが取れず、安政六年(一八五九)、松陰が江戸で処刑されるに及んで松下村塾は閉塾となった。

素彦は藩主敬親の下で藩政改革に携わっていたが、明治維新の原動力となった薩長同盟に際し、桂小五郎を坂本龍馬に紹介するなど、同盟結成に尽力した功績は大なるものがあつた。

世情が緊迫してきた中、慶応三年(一八六七)藩主の命で、小田村伊之助から楫取素彦へ改名した。明治元年(一八六八)素彦は新政府の参与に任命されるが、藩主の意向により藩の職務に専念するため直ぐ辞している。

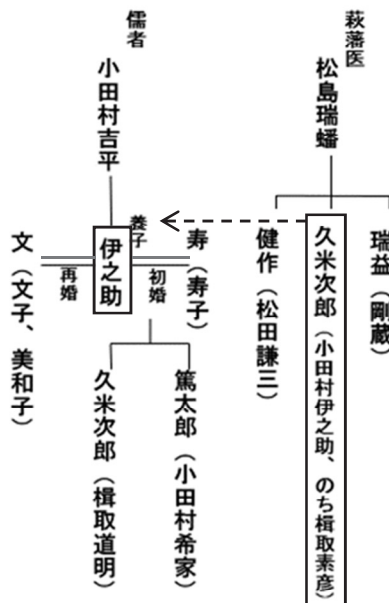
その後、明治三年から牧民官(地方官)として出仕し、山口藩三田尻、足柄県(明治五年二月から同七年七月)、熊本県、群馬県と勤務した。特に、群馬県令時代(明治九年から同十七年)の足掛け九年の間には、国に頼らず小、中学校

を次々と創設するなど群馬県を全国トップクラスの教育県にした。また、産業面では養蚕、生糸、織物を一貫して生産する体制を整えるなど殖産興業を奨励した。一時は存続が危ぶまれた富岡製糸場の立て直しに尽力した結果、今日の世界遺産登録にも繋がっている。

この間、明治十四年(一八八二)に妻、寿を亡くしている。同十六年(一八八三)に再婚する(文も再婚)。

その後、華族に列せられ、貴族院議員を務めたが、明治三十年(一八九七)素彦は妻の美和(文あらため)とともに明治天皇の第十皇女貞宮の御養育係に任命された。貞宮は病弱で同三十二年(一八九九)一月十日酒匂の松涛園

楫取素彦略系図



杉家略系図

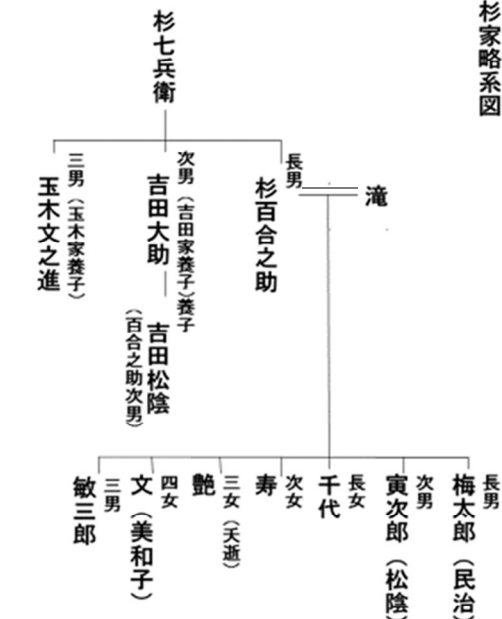


図1. 楫取素彦、杉家関連略系図

で亡くなった。この時、楫取夫妻共お側近くに控えていたので、文は小田原に来たことがあると考えられる。(図1・楫取素彦、杉家系図並びに、表1・楫取素彦略年譜参照) 以下、楫取素彦の約二年半の足柄県の事跡を中心に据えながら、

その経歴をたどってみたい。

足柄県の誕生

明治四年七月、政府は廃藩置県を実施、小田原藩は小田原県となった。その管轄は、足柄上、足柄下、大住、淘綾の四郡であった。この時、現在の県域には、他に神奈川府からの神奈川県と六浦県、荻野山中県の三県があった。それに伴い、藩知事を免ぜられた大久保忠良は華族に列し、東京に移住した。

同年九月、六浦県、荻野山中県は神奈川、小田原の二県に統合され、十一月には神奈川県、足柄県の二県に再編成された。

足柄県の県域は、相模国の足柄上、足柄下、高座、愛甲、津久井、大住、淘綾の七郡(小田原県)と伊豆の国一円(葦山県)とを併せた地域で、県庁は小田原(県庁所在地―小田原城二の丸)に置かれた。また、伊豆一円管轄のために田方郡葦山に支庁が置かれた。(高座郡は十一月中に神奈川県に管轄替えとなった。)この足柄県は明治九年四月に神奈川県に統合されるまでの四年六ヶ月の短期間の存続であったが、楢取素彦はその間の二年半在籍したことになる。

当初の足柄県参事(知事)は旧葦山県判事、大参事を歴任した柏木忠俊(文政七年―明治十一年)

であり、権参事(副知事)は元伊万里県少参事杉本芳熙であった。柏木忠俊が足柄県に在籍(履歴別記)したのは足柄県存続の全期間であり、その業績については別途顕彰されることが望ましいが、当初の最大の課題は豆相の融和であったと思われる。

明治六年の足柄県は人口三四万四三六九人、戸籍七万九〇八戸であり、町村数は旧国別で、相模国六郡三九町三八一村、伊豆国四郡三七町二八一村、伊豆七島(注、明治三年葦山県、同四年足柄県、同九年静岡県、同十一年東京府に編入され、現在東京都に所属)二二村であった。また、『明治小田原町誌』によれば、明治五年二月の小田原の人口は一万三三〇六人、戸数二九九三戸であり、うち土族が人口の四二%、戸数で三八%を占めていた。

何故、相模と伊豆が一緒にならなければならなかったのか、さらに言えば、たった四年余りでその相模と伊豆が分離しなければならなかったのか、種々勘案されるところであるが、その統治に当たった人々は前述のように両地の統合融和に努力することとなった。

柏木忠俊は足柄県知事を全うしたが、明治五年二月に足柄県七等出仕、八月に参事(副知事)となったのが、楢取素彦(履歴別

記)であった。

楢取は知事ではなく、副知事であったことから明治五年から七年までの治績は柏木知事を補佐するものであったということになるが、当時は知事、副知事一体となつて課題、難局に当たったことと考えられる。以下、楢取在籍中の足柄県における事象を点検、検証することとしたい。

柏木忠俊足柄県履歴

(楢取在籍中の経歴、その後明治九年四月十八日廃県まで在籍)

足柄県下伊豆国田方郡金谷村農通称総蔵 文政七年甲申三月生

明治四辛未年十一月十三日 任足柄県参事

明治五壬申年七月二十五日 任足柄県権令

同年十一月十日 叙正六位

明治七甲戌年九月十四日 任足柄県令

同年十一月八日 叙従五位

楢取素彦足柄県履歴

山口県士族 文政十二年乙丑三月生

明治五年二月三日 補足柄県七等出仕

同年八月九日 任足柄県参事

同年十一月十日

叙従六位

太政大臣従一位三条実美宣 大内史正五位土方久元奉

明治七年七月十九日 転任熊谷県権令

足柄県における事蹟

『楢取素彦伝―耕堂楢取男爵伝記―』(山口県萩市、群馬県前橋市発行、群馬県文化事業振興会、平成二十六年)の牧民事蹟によれば、「君が国家のために尽瘁せる功労多き中に、最も長大な光焰を放ちしは、牧民官、即ち地方長官たりし時代の事蹟なり」として、山口藩三田尻管事、足柄県七等出仕、参事、熊谷県権令、県令、群馬県令を経歴し、明治十七年七月、地方官を辞するまで、牧民の職に尽くせること、前後十五年の久しきに至れり、としている。

さて、足柄県においては、先ず在任中の諸事象を概観してみたい。(参照、『小田原市史』、『明治小田原町誌・上』)

明治五年(一八七二)

四月十三日 足柄県、文武館を閉校して日新館と小田原

英学校(共同学校、変則中学校)を設立

十一月二十四日 足柄県、大区小区制を導入、五大区五十二小区に区画する。(小田

原駅は第一大区小一、二区)

明治六年(一八七三)

三月十九日 足柄県、徴兵検査を実施

八月四日 天皇、皇后、宮ノ下へ向かう途中旧本陣大清水に宿泊、地引き網を見学

八月二十八日 帰途の際も宿泊、足柄県庁、足柄裁判所に立ち寄り、八月三十日出発された

明治七年(一八七四)

三月十七日 足柄県、地租改正事業着手を布告、十一月地租改正掛を設置

五月 真鶴、吉浜、門川、岩、江ノ浦、根府川の六か村が石切会所を再開し、相模六ヶ村石山会社(真鶴会社)を設立

六月十日 高梨町に小田原電信局を開設

八月二十三日 足柄県、群馬県、富岡製糸場へ伝習工女二十一人、取締役一人を派遣、小田原からは十一人が参加

楯取素彦が足柄県七等出仕となったのは明治五年二月、年令満四十二才十一月であった。年令が高く、維新の功労者でありながら何故七等出仕からであったか、また、何故足柄県であったか、当時の新政府の恩惑、裁量があったと思われる。

素彦は出仕任命から二ヶ月後の四月二十七日と二十九日の二

度、「薄弱之生質、時々眩暈相発、昨今難渋之体に罷在」ということで辞職願を出しているが、これも却下されている。政府からは辞表は幾度出しても採用されないとしている。以後二年五ヶ月県政に尽力することとなる。

素彦は後年の群馬時代もそうであるが、教育や殖産事業に意を注いでいる。明治五年八月の学制頒布を受け、徳性涵養を主眼として、学校教育の普及振興のため、足柄県に中小学校開設資金として百円を寄付している。

また、県内の有志が真鶴会社を起こして、根府川の石材を採掘しようとした際には、多額の援助をしている。

明治天皇・皇后の行幸啓については、明治五年六月皇后が箱根宮ノ下温泉に行啓された際と七月宮ノ下より帰られる際小田原に泊まられた。明治天皇は、五月に軍艦で大阪中国四国筋行幸の後、七月熱海に上陸後小田原に宿泊、宮ノ下温泉に行幸される予定であったが、ロシア皇太子が東京に到着されたという知らせにより予定を変更され東京に戻られた。

次いで、明治六年八月四日、宮ノ下温泉行幸啓の際、当町行在所清水正碁方に馬車が到着した後、午後天皇は乗馬、皇后は輿で旧砲台下の海岸に出られて、曳き網を

御覧になった。以来、記念として、その場所を御幸の浜と称すと『明治小田原町誌』に誌されている。

八月二十八日、両陛下は宮ノ下温泉より帰られ、当町行在所に到着午後、天皇は乗馬で足柄県庁及び裁判所を訪ねられ、酒膳料を賜った。その夜天候が変わり大風雨となったため、天候回復を待って、三十日に帰られた。その間、柏木県令、楯取参事の諸事への奉仕、奔走は多大なるものがあつたと思われる。

また、楯取は行幸啓に際し、詩歌をいくつか作っているが、曳き網の感懐として、

わたつみの 神もみゆきを
待ちつらん よろきの磯に
あら波もなし

と詠んでいる。宮ノ下の行在所にも日々伺候していたが、その際の作歌、漢詩(七言絶句)として、次の詩歌が残されている。

夕立
まちわひて 空かきくもり
ひとむらの 稲葉の末を
すくる夕たち

避暑

万豊青山筆道長
君王消暑幸温湯
百僚莫促回鑾日

金殿玉堂無比涼

詩歌については、明治六年十一月、管内巡視の途中、葦山に至り、江川太郎左衛門英龍を追懐し、本立寺の江川の墓を前に一首作っている。

武幹才名両超翹
百年風采暗魂消
墳前侘立有余感
宰木蒼々寒翠喬

(詩歌はいずれも『楯取素彦伝』(前出)より引用)

平成輔の忠魂を弔い、遺蹟に文を草し碑を設ける

平成輔は、南朝の後醍醐天皇がまだ皇子の頃から側近に仕えた公卿であった。南朝方は元弘元年(一二三二)鎌倉幕府討滅の陰謀が事前に漏れ、天皇は笠置山に逃れた。成輔は六波羅探題に捕えられ、元弘二年鎌倉へ送られることとなった。五月二十二日、明日は鎌倉入りという日、箱根を越え、小田原の早川尻に到着した。そこで、鎌倉の使者に会った後殺害されてしまった。その遺骸は近くの浄土宗潮音寺に埋葬された。現在、墓所は南町報身寺の入口に近い所にある。墓の右側に大きな石碑、宰相平成輔碑(縦二四〇センチ、横一五〇センチ)があり、「海軍少佐三品大勲位威仁親王篆額、元老院議



図3. 楫取素彦・美和夫妻の銅像
(防府天満宮)

貞宮の御養育主任となる
明治天皇の第十皇女貞宮多喜子内親王は明治三十年九月二十四日に誕生(母は権典侍園祥子)されたが、素彦は既に同年八月十八日、皇女降誕御用係となっていた。命名式並びに祭典は七夜

とある。
碑文については、『小田原史談』第二一二号(二〇〇八年一月)、齋藤清一郎「南朝の忠臣・平成輔卿の墓に纏わる余話」の中で紹介されているので参照されたい。

官従三位勲三等男爵楫取哲撰、明治二十二年十二月建、永原俊章書」とある。ここで「楫取哲」は楫取素彦のことで、諱の希哲から来ている。碑は草に覆われ、現在、文章は定かではないが、素彦の想いが偲ばれて、感慨無量である。年譜によれば、明治二十年八月平成輔碑文を撰す、とある。

に行うことを慣例としていたが、七夜に当たる三十日は先帝の忌日に当たるということにより、一日延期された。十月一日、御降誕御用係男爵楫取素彦に金百円、白羽二重二匹が下賜され、同妻(文あらため美和)以下御誕生関係諸員にも金員及び品物が下賜された。また、この日、素彦は貞宮御養育主任となった。夫婦は東京に出て青山離宮に設けられた貞宮御殿で生活することとなった。十月二十四日、内親王は初参内し、天皇、皇后と会われたが、素彦以下奉仕諸員に御下賜があった。明治三十一年四月二十二日には賢所に参拜、終わって参内している。

内親王は一年余、順調に成育されていたことと思われるが同年十二月下旬頃、発症された。そして、二十余日後の明治三十二年一月九日、足柄下郡酒匂村松涛園に移って加養されることとなったが、十日夜半脳膜炎を発症、治療の効なく、十一日午後四時に亡くなられた。十七日豊島岡に葬られた。

三月三日、素彦には金五千円及び紋附七宝、花瓶一对を下賜され、その労を慰撫された。防府の松崎神社(現在の防府天満宮)には貞宮遙拜所が建てられ、素彦は命日には欠かさず出席していたという。

表1. 楫取素彦(小田村伊之助)略年譜

年号	西暦	月日	事蹟
文政12年	1829	3月15日	素彦、長州藩医松島瑞蟠の次男として萩城下に生まれる。
天保11年	1840	6月15日	儒者小田村吉平の養嗣となる。
弘化4年	1847	6月2日	養父吉平没、9月家督を相続。
嘉永3年	1850	3月	江戸藩邸の勤務となる。
嘉永6年	1853	7月	吉田松陰の妹杉寿(天保10年生)と結婚。
安政6年	1859		藩主毛利敬親の侍講となる。
元治元年	1864		「俗論派」により野山獄に投獄されるが、翌年「正義派」により助けられる。
明治元年	1868		倒幕のため従軍するが、ほどなくして、敬親の側近として萩に戻る。
明治3~17年	1870~1884		三田尻管事、足柄県参事(本文参照)、熊谷県令、群馬県令等地方官を歴任。
明治14年	1881	1月30日	妻、寿没。
明治16年	1883	5月3日	寿の妹文(天保14年生)と再婚、文は安政4年、松陰のすすめで久坂玄瑞と結婚したが、元治元年、禁門の変で玄瑞が自刃したため、未亡人となっていた。
明治17年	1884	7月31日	元老院議員となる。
明治20年	1887	5月24日	勲功により華族に列し、男爵となる。
明治23年	1890	7月16日	貴族院議員に当選、以後30年、37年と三選。
明治30年	1897	10月1日	明治天皇第十皇女貞宮御養育主任を仰付けられる。
明治32年	1899	1月11日	貞宮多喜子内親王薨去、同日、故内親王葬祭の喪主を仰付けられる。
大正元年	1912	8月14日	山口県防府市の本邸で没。正二位勲一等授瑞宝章。8月21日大楽寺に埋葬された。(防府市毛利家の菩提寺である。)
大正10年	1921	9月7日	妻、文(美和子)没。夫妻で大楽寺に眠る。

おわりに
楫取素彦は神奈川県全体まで広げると、安政三年二月から同四年四月まで、三浦半島南西海岸警備にあたつていた。
また、寿、文の兄吉田松陰は母滝の兄竹院が鎌倉瑞泉寺の住職をしていたことから、アメリカ密航の相談等のため、四度鎌倉を訪れている。(竹院はその後、安政二年円覚寺一九八世住職)

さらに、松陰のすぐ下の妹で、寿、文の姉である千代の子、庫三は、県立小田原高校の前身県立第二中学校初代校長として明治三十四年の開学から同三十七年まで勤められている。(当時小田原中学は現在の小田原駅的位置にあった。)また、後には県立第四中学校(現横須賀高校)の初代校長も勤めている。
以上のように楫取や吉田家の人々は本県や小田原と縁がある。これらを踏まえて、幕末維新を生き抜いた楫取素彦の事蹟、業績を見つめ直してみることは意義あることと思われる。

箱根神社境内に建つ吉田松陰の和歌碑

直江 博子

はじめに

現在NHKでは、大河ドラマ「花燃ゆ」を放映中である。番組の最後には、「花燃ゆ紀行」と題してドラマゆかりの地が紹介されている。四月十九日(日)に放映された第十六回の「花燃ゆ紀行」では、箱根神社の境内に建つ吉田松陰の和歌碑が紹介された。そこで箱根神社をお訪ねし、同神社の欄干・学芸員でいらつしやる柘植英満氏から吉田松陰の和歌碑についてお話を伺うことができた。ここにご紹介をさせていただきます。と思います。

松陰、野山獄へ

嘉永六(一八五三)年一月十六日のこと、松陰は長州藩から十年間にわたる諸国(諸藩)遊学を許され萩を発った。さてその年の六月、幕府に開国を迫るために、浦賀沖にペリーの率いる黒船が来航した。松陰が密航してでも海外事情を知りたいという情熱を胸に抱き始めたのはこの頃からである。

翌年一月ペリーは軍艦を率いて再び来日し、幕府は日米和親条

約を締結する。松陰はかねてより願いを果たすべく弟子の金子重輔とともに下田に停泊中のペリー軍艦の一隻に近づき乗り込んだが、ペリーは、アメリカへ連れて行ってほしいという松陰の願いを聞き入れなかった。

日米和親条約を締結したばかりの今、二人の密航に加担すれば日米両国の外交に悪影響を及ぼしかねないと考えたためである。二人はやむなく諦め、自首し、罪人として唐丸籠に載せられて東海道を下り、萩へと送られて投獄される。

松陰の入った野山獄では松陰入獄後、大きな変化が起こった。獄の囚人たちが集まって句会が行われたり、松陰による『字亭』や『論語』の講義が行われたりするようになったのである。野山獄での唯一の女囚が高須久子であった。松陰は獄で彼女と知り合い、互いに句や歌を通して想いを交わすようになったという。

一年一ヶ月余を野山獄で過ごした松陰は出獄がかない、家族の待つ家へ帰るが、その一年余り後、藩命により再び野山獄に

投獄される。かつての同囚の多くは出獄していたが、高須久子はまだ獄中の人であった。世間では安政の大獄の嵐が吹き荒れていた。幕府から、吉田松陰を江戸へ護送せよとの命が下り、安政六(一八五九)年五月二十五日、松陰は駕籠に乗せられ、野山獄を後にする。

吉田松陰の和歌碑

私が箱根神社を訪れたのは、本年七月二十六日である。神社本殿に至る石段を芦ノ湖畔の方へと下っていくと、湖畔には「平和の鳥居」が立っている。その鳥居を右手に見ながら左へ折れると、遊歩道があり、その道をたどって行くと、箱根神社舟庫に突き当たる少し手前の左側に、苔むした段々がある。その階段を上り切ると目の前が開け、「吉田松陰の和歌碑」が建っている。和歌碑には、

箱根山

越すとき汗の

出でやせん

君を思ひて

ふき清めてん

吉田松陰

と刻まれている。歌碑の裏面には次のように刻まれている。

歌碑の説明

吉田松陰は、萩藩山鹿流兵学師範。藩校明倫館で兵学を教授した。下田に黒船来航の時、海外渡航を図り失敗、下獄した。獄中で孟子を講じ、囚人の出獄運動にもつくした。

出獄後、松下村塾を主宰し、至誠を貫いた個性教育により、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋、山田顕義、品川弥二郎、等多くの人材が育った。

再度野山獄に投ぜられ、幕命で江戸に送られる時、女囚高洲久子(ト)より、手のとほぬ雲におうちの咲く日かなの句と汗ふきを贈られた。

碑面の和歌は、別れに際して詠んだものだが、生真面目で知られる松陰の優しい一面がうかがえる数少ない和歌である。

安政の大獄に連座し、永訣の書(ト)に

親思ふこころに

まさる親(ト)ころ

けふの音づれ

何ときくらん

の歌を残して満二十九歳の生涯を閉じた。

平成六年十月吉日

萩市 観光協会

松陰神社 萩旅協同組合

和歌碑を見学させていただいた後、箱根神社社務所にて柘植英満氏より、お話を伺った。

和歌碑建立の経緯

まず、箱根神社境内に吉田松陰の和歌碑が建てられている理由を教えてください。

平成六年のこと、当時の萩市長野村興兒氏と萩市観光協会が先頭に立ち、全国の吉田松陰ゆかりの地に、松陰の歌碑を建てる運動をなさっていた。ちょうど萩の松陰神社の宮司様(当時)と箱根神社の宮司様(当時)が知り合いであったため、萩の松陰神社の宮司様が間に立たれ、吉田松陰が箱根神社に参拝したという史実はないものの、下田から萩へと護送される時と今度は萩から江戸へと護送された時に、ともに箱根神社近くの箱根関所を通っていることから、箱根神社の境内に松陰の歌碑を建てましょう、とすぐに合意に至ったという。

和歌碑は萩の地で石を選ぶところから始まり、文字もすべて刻して完成させた状態で、トレーラーに載せられ、はるばる箱根まで運ばれ、そして箱根神社境内に建てられた。和歌碑は、松陰が通った箱根関所の方角であり、かつ彼の故郷の萩の方角である南を向けて建てられている。

和歌碑の裏面には「親おもふ」ではじまる松陰の和歌が刻されているが、この和歌は萩の方々のご意向により松陰の遺した和歌の中から選ばれて刻された。

碑面に刻されている和歌は、松陰が江戸送りになるに当たり、獄中の高須久子から餞別として一枚の汗ふきを贈られたことに對して、松陰が真心を込めて詠んだもの。松陰は下田から萩へと送られた際に一度、箱根の関所を通っている。そのために箱根は山坂が多く、難所が多いことを既に知っていた。この和歌の歌意は、

江戸に向かう東海道最大の難所である箱根山越えの際には、たくさんの汗が出ることでしよう。その時あなたのことを想い出しながら、戴いたこの汗ふきで身体を汗をふき清めましょう(3)。

というものである。

松陰はかつて箱根関所を最初に通った時のことを自身の著書『回顧録』に「箱根ハ事迅速ニシテ威アリ、荒井ハ是ニ反ス(4)」と記しており、囚人として護送されつつも、関所のことを冷静に観察していたという。

吉田松陰の最期

江戸送りとなった吉田松陰は、安政六(一八五九)年六月二十五日に江戸へ着いた。

翌月の七月九日に評定所で訊問を受け、伝馬町の獄につながれることとなった。松陰が四回目に評定所に呼び出された際、彼は死を覚悟したという。

そして同年十月二十日付の松陰の手紙は、まず萩にいる父、兄と叔父に宛てて、

平生の学問浅薄(せんぱく)にして至誠天地を感格(かんかく)すること出来申さず、非常の変に立ち至り申し候。嗚々(さぞさぞ)御愁傷も遊ばさるべく拝察仕り候(5)。

に始まり、続けて「親思ふころにまさる親ごころけふのおとづれ何ときくらん(6)」の和歌をしたためている。これが和歌碑の裏面に刻されている和歌である(これは松陰の辞世の句ではない)。自分が親を思っているよりもさらにさらに深い心で、子である自分のことを思ってくれている親心のありがたさを詠んでいる。次に同じ手紙の中で、自分の実母と養母とに宛てて、刑死後の自分の首は江戸に葬り、家祭には、日ごろ自分が愛用していた硯と(その硯は十余年にわたって

自分の著述を助けてくれた功臣であるから)、昨年十一月六日に差し上げた手紙とをまつてほしい、と頼んでいる。

手紙が書かれた七日後、吉田松陰は刑場の露と消えた。

お話を聞かせてくださいました箱根神社禰宜・学芸員柘植英満様に、心より御礼申し上げます。

注

(1) 山口県立山口図書館に問い合わせたところ、高須久子の須に須と洲のどちらを用いるかは、資料により「高洲家」と書く場合もある。但し「高洲家」と書く場合には、洲の字が用いられるようだとのことである。

(2) 安政六(一八五九)年十月二十日付の松陰が父、兄、叔父、実母、養母宛てに出した手紙。(山口県立山口博物館編「維新の先覚 吉田松陰」山口県教育会一九九〇年、一六六頁)

(3) 禰宜 柘植英満「吉田松陰の和歌碑」(『箱根』第二五八号 箱根神社社務所 六頁)

(4) (3)に同じ

(5) (2)に同じ

(6) (2)に同じ

参考文献
『箱根』第二五九号 箱根神社社務所
徳永真一郎「吉田松陰―物語と史蹟をたずねて―」成美堂出版 一九七六年
田中彰「松陰と女囚と明治維新」日本放送出版協会 一九九〇年

五十嵐写真館百二十年の記憶

話し手 五十嵐 史郎さん

創業は明治三十年

今年(2015年)は神奈川県の写真師会ができて丁度百年なんですね。それで先日(六月二十九日)に組合の式典が横浜でありました。

そのときに県内で百年を超えた写真館(創業百年会写真館)が十二軒ありまして、最も古いのが明治十一年(一八七八)創業の宮の下の富士屋ホテル(嶋写真店)なんです。うちは明治三十年(一八九七)ですから、小田原では一番古いことになりましたね。

初代は「五黄の寅」

ご承知のように、五十嵐写真館というのは初代がおばあさんなんです。ハルおばあさん。

ハルさんは明治十一年生まれで、小田原の東、酒匂村の山王原(今の小田原市東町)の前田という半農半漁の家の長女(父莊吉、母ハシ)なんですね。

ハルさんは干支が「五黄の寅(ごおうのとら/ごうのとら)」なんです。五黄の寅生まれは気が強いといわれていて、今はそんなことを言う人は少ないでしょうけど、当時は気になさる人もいて、そこ

で両親が、このまま成長したら嫁の貰い手が無いだろうと、何か手に職をつけなければこの先心配でしょうがないと。

それで、ツテそのものは私の方ではよくわからないですけど、横濱の野毛の三田写真館に養女にやられたんです。弟子入りでなくて養女です。明治二十三年(一八九〇)、ハルさんが数えの十三歳のときでした。そこで自分の技術と女性としての矜けをおそわったんでしょう。

実はその店にハルさんの亭主になる人が修業にきていた。五十嵐糸吉とって、その糸吉さんと仲良くなったんです。

駆け落ちして街頭写真屋

写真の技術にもある程度自信があつたんでしょう、ハルさんと糸吉さんは三田写真館を駆け落ちしてしまつたんです。それで横濱の宮崎町で開業したわけです。

開業といつてもなにしろ糸吉さんが二十、ハルさんが満十八才のときです。明治十九年(一八九六)その看板(写真1)には「写真館」「出張店」と書いてありま

写真1



すけど、おそらく街頭写真屋だつたらうと思うんです。これもあくまで今までの経過を我々が想像してそういう結論というんですか・・・。

それで宮崎町で営業したんですが、開業して翌年(明治三十年)、野毛に大火があり、そのときに焼け出され、

そこを諦めてハルさんの地元小田原に戻ってきました。持つてきたのは古いレンズ一個とこの看板だけだつたそうです。

小田原で始めた当時はもちろん写真館などできるわけではないし、やはり街頭写真です。丹那トンネルが出来る前は東海道線が国府津から松田・山北を通つてましたから、

松田・山北の近辺のお祭りがあるとかが何かあるとかいうと、ふたりで暗箱を担いで営業していました。

大震災後の再建

ふたりで苦労に苦労を重ねて、大正十一年(一九二二)に写真館を建てたんですが、翌



写真2 昭和6年～昭和52年までの五十嵐写真館

年の関東大震災でその建物は潰れてしまつたんです。震災後に再建したのが昭和六年(一九三二)で、それまでは仮のスタジオでした。隣の材木屋の加藤さんが他所へ引越すからというのでその土地を買って敷地が広くなり、本格的な建物を再建しました。それが小田原に根を下ろす基盤になったんです。その建物は、昭和六年から昭和五十二年迄小田原の写真館(写真2)として親しまれました。ハルさんがなぜ初代かといいますと、糸吉さんは大正三年(一九一四)、三十八歳のとき(ハルさん三十六歳)に病気で亡くなつてしまつて、残された六人(男四人、女二人)の子供をハルさん一人が教育しながら写真館を守りきつたからです。ですから、うちでは糸吉さんの話題はまず出ないです。

泊ることはあいならんと

うちの父(登)は小学校を出てすぐ千葉市の丸山写真館へ修業に行つて、そこで写真の腕を磨いたんです。

大正三年に糸吉さんが具合が悪くて亡くなったとき父は修業中だということで、わけを言つて葬儀に帰つて来ることは許されたんですが、ハルさんは、「お前はいま千葉の丸山さんに預けてあるんだからうちへ泊ることはあいならん」と。父はお焼香だけして、ハルさんが千葉へ帰しちゃつたんです。そのへんが凄いですね。もつとも優しい顔してたら六人の子供を育てられないですよ。父は丸山写真館には六年いました。

*丸山一郎氏未亡人の話「五十嵐さんはほんとに神様みたいな人でした。主人の仕事を先へ先へと仕度し、出張撮影でも一度も会計を間違えませんでした。」(五十嵐写真館所蔵アルバムから)

嫁には厳しかつた

大正九年(一九二〇)に父が結婚して家庭を築いた時点で、ハルさんは写真の仕事から一切手を引いて、その代わりあとは写真の水洗とか一枚一枚、ほんとに裏方の仕事に徹して私の両親を支えてました。



写真3 昭和8年の五十嵐さん家族と従業員
前列中央が史郎さんを抱く祖母(ハルさん)

ハルさんは自分の後を継ぐ父よりも嫁である母の教育には厳しかつたですね。なにしろ母は生涯ラッキョウなど匂いのある香料は一切口にしてはいかんと。お客さんにたいしてそれが匂つたら失礼だと。梅干しもだめでした。

母は飯田岡から来たんです。実家へは年に二回か三回帰ります。何を許したんですが、何時までに帰つて来なさいよと、行く前に帰りの時間をピシッと指定して、それに間に合わなかつたらたいへんでした。実家へ行きますと、実家の母親が「お前、今日は何時に帰るの」と一番最初に聞いたというんです。下の方の弟や妹の教育はもちろんたいへんだ

つたでしょうけど、厳しいということはあんまり話に聞かないんですね。その分、嫁の教育はもの凄く厳しかつたといひます。

当時はボールペンなどでなく全部筆で、お客さんへの台帳などへの書入れはお前の役目だからと、母親は毎日習字の練習をさせられたといひます。ですから、晩年になつても字はうまかつたですね。

柱に縛られた記憶がある

私などは両親は店の仕事で忙しくて、殆どハルさんに育てられたんです。ハルさんには怖いという印象がまず第一ですね。

ハルさんははたつても小柄ですが、その怖さつたら、私なんか小学校へ上がる前あたりには、ほんとにやんちゃないたずらだと、一度くらいですけど柱に縛られた記憶があります。

ハルさんは礼儀作法とかには特に厳しかつた。私は今でも自慢じゃないですが食べ物に好き嫌いが一切ないです。ハルさんに仕込まれたから。何か子供の頃嫌いな物があつたにしても、「これは」なんて言うのと、「じゃ、食べなくてよろしい」と、それを引き下げちゃう。なにしろ言葉遣いとか食べ物が好き嫌いだとか、時間を守ること、そういつたような普段の躰けには、ハルさんははたつても厳

しい人でした。

ハルさんは、家の中でものんびりと歩いたことのない人なんです。例えば下駄を新しく買つてき、これが古くなつて捨てて、後ろの歯は殆ど減つてないです。表を歩いてるときでも、私なんか一緒に歩いていても負けるくらいで、普通に踵を着いて歩くんじゃない、つま先からなんです。それも前ごみでこうして歩いてるんですね。ですから下駄の後ろを着かないんです。だからハルさんの下駄はすぐわかるっていう具合です。その代わり、鼻緒のところは擦り切れちゃつてる。

下岡蓮杖翁と仲が良かった

ご承知のように下岡蓮杖翁(一八三二-一九一四、関東の営業写真館元祖)は伊豆の下田の生まれです。お店が横浜にありまして、下田と横浜を往復するんで小田原を通つたんです。どういうふうになり合つたかわかりませんが、ハルさんとつても仲良くなりましてねえ。下岡蓮杖翁がこの小田原を通るときに必ずうちへ寄つて一週間とか十日とか泊つてらつしやるんです。

それで下岡蓮杖翁に描いてもらったのがそれです(写真4)。これ直筆です。ご覧になればわかると思うんですけども、九十歳と書いてあります。大正二年(一九

写すのは一枚だけ
父が閑院宮家のお出入りで宮様を撮った写真もあります。外出

一三 になりますかね。
だからこれを同業者が見ると、凄いなあと。展覧会の際に出してもいいですよと言ったら、畏れ多くて借りられないと言われました。何十年も大事に戸棚にしまっていてありましたんでシワもあります。今年になってこれを店に出したんです。
むかしは書割(背景画)がありましたね。あれなどを下岡蓮杖翁に描いてもらったら嬉しいです。だけど、書割は消耗品ですから…。
今になって一番残念なのは、下岡蓮杖翁とハルさんのツーショットの写真が一枚もないんですよ。一枚でもあればと悔やまれます。しかし一般のお客さんではなかったんで写さなかったのです。
ハルさんは「レンジョーさん、レンジョーさん」と言っていましたけどねえ。



写真4 下岡蓮杖翁の画

古い写真から
うちにある写真のなかで一番古くて状態が良いのはこの写真です

用暗箱のジャバラを準備して、シヤッターもピントも全部済ませ、それで引き蓋を引いてから、出来ましたと言うと、殿下がすーっと来られて、パツと坐って、ハイと一枚だけです。二枚撮りはできません。
益田男爵家もお出入りで男爵を写した(写真5)のも父です。男爵が父をとてども気に入られまして、うちには座敷にあぐらをかいて坐ってる写真もあります。
この方ももの凄いい気難しい方で、絶対に待たしたら御機嫌斜め。もう坐られたらパツと写した一枚だけ。ですから、これ写す前に他の人が坐ってるんですよ。カメラを備えつけてピントも合わせ、ライントも全部準備してそれでOKという、引き蓋を引いて待ってるんです。行くときは父一人です。他の人は家に入れてくれません。

戦争中のこと
昭和二十年(一九四五)は、私が旧制中学二年です。そのころ市内に三ヶ所ぐらい軍隊が泊まってきました、その中隊長がうちに泊っていました。二階に中隊長、下に尉官が三人。そのうちの一人はいいおじいさんの少尉でしたね。

夕方になると新兵が馬に中隊長を乗せて帰ってくるんですよ。朝は馬を連れて迎えにくるんで

(写真6)。これが明治三十五年くらい。オリジナルですから。伸ばしじゃありません。密着です。富士登山の写真(写真7)。大正七年。行く前にここで撮影していった。草鞋・浴衣姿で塵を持っていく。後ろは書割。



写真7 富士登山(前列右は史郎さんの奥さんの伯母) 大正7年



写真6 一番古い写真 ハルさんの家族 明治35年頃



写真5 益田男爵 (撮影年月不明)

す。寝泊まりするだけで食事は出さなかつたと思います。

我々中学生は、勤労働員や農繁期に手伝いに行ったり、陣地構築に行っていました。陣地構築では兵隊にこき使われました。兵隊でも一つか二つの星の連中が我々中学生を怒鳴りつけるんですよ。

松田の寄(やどろぎ)まで植林に行ったり、大雄山まで電車で行って、そこから道了さんまで歩いて切ったばかりのナマの板を担いで、陣地をどこへつくるか知らないけれど、山道を一日何回往復したか覚えてないですが、なにしろこき使われたことだけは覚えています。

別の日には、根府川辺りの山道で、学校の授業の一環かなあ、山道を二人か三人で歩いていううちに、戦闘機にバリバリつとやられた記憶があります。もう、ただ黙ってじっとしているほかに・・・動いたらやられちゃうんじゃないですか。

八月十五日未明の小田原空襲は見えました。そして昼間になったら放送でしょう。あれーと思いましたがね。戦争が終わって、それでうれしかったという気持ちはありませんでした。灯火管制がなくなつて一番楽になりましたね。

四男史郎が跡を継ぐ

上の兄二人は戦死しています。

長男の真雄は、ただ南方というだけで、どこで、いつ亡くなったかわからないですね。父は未復員の会の副会長をしていたので、うちの息子は絶対生きていたからと、戦死の公報を受けなかつたんですよ。もししたら、他の人が公報を受けられないから五十嵐さんどうしても受けて下さいと、それでやつと昭和四十一年の七月八日、この日に、それじゃあ受けましたと。仕方なくこの日を命日としました。

次男の誠夫(のおお)は海軍に入つて特攻隊で終戦の二ヶ月前に海で亡くなりました。亡くなつてから直に遺品のトランクが届けられ蓋を開けると

- 神風特別攻撃隊
- 神雷部隊 龍巻隊
- 海軍一等飛行兵曹
- 五十嵐誠夫
- 昭和二十年六月一日(享年二十歳)

と書かれていました。三男は別の仕事をしていたのですが、四男の私にお鉢が回ってきたんですね。

私は旧制と新制の切り換えで、旧制中学中退です。もう一年行っている高校二年になったところを四年でやめて、ここで父に仕事を仕込まれました。

私が仕事に入つたのは昭和二

十四年(一九四九)です。父は写真に關してはすごい厳しい人です。正直なはなし、父には意味なく怒られましたね。こんなことで怒られるのかなあと思うくらい怒られました。我慢の一途でしょうね。

中学行くまでは、家業の写真やるとは全然思つてもみなかつたです。仕事を始めて、お客さんが喜んでいただく顔をみるのが一番の楽しみで、それ以外、つくる過程においては、父の小言を耳の後ろで聞いていました。

それからもう、婚礼写真を何千組と撮影したかわかりません。うちの材料はすべて浅沼商会からです。というのは、そこに私の叔父さんが何十年も勤めていましたから。ですから、黙つても材料の新しいのが入ると、叔父さんから話がありました。フィルムも印画紙も全部富士フィルムからきました。印画紙ですと、全紙の五十枚入りをとりまして、夜暗室に入つて、カッターで切るんですよ。

カメラを持てば怖いものなし
どんなに偉い人でも、私自身がカメラを持つていけると、何のためらいもなく傍に行きますね。シャッター押せる。それは不思議です。カメラさえ持つていれば。それは職業意識ではないでしょうか。カメラを持つていられるだけでどんな



写真9 鈴木市長と大谷竹次郎(松竹社長)(昭和37年)



写真8 (2代目)尾上松緑 市民会館落成記念時(昭和37年)

ところでも平気で行きました。将棋の木村名人のお宅へも行ったことがあります。ただ行つてくると言われたつて、ちよつとね。歌舞伎の(二代目)尾上松緑を撮つたこともあります(写真8)。昭和三十七年(一九六二)、小田原の市民会館の落成記念に来たんです。太閤記十段目の光秀で、花道を松緑がこう・・・。私が好きなの写真なんです。ロビーで鈴木

市長と松竹の大谷竹次郎社長が話しているところを撮影したら、市長も喜んでね(写真9)。その写真も何もみんなネガも図書館に寄贈しました。

私は白黒専門で、父がカラーのリバーサル専門です。これは今の小田原城の天守閣です。昭和三十五年(一九六〇)に横浜の慶寺丹長という彫刻家が彫った鯨(しゃちほこ)を小田原へ運んできて、これ、取り付けたところなんです。足場でも何もつけずに登って行って撮りました(写真10)。この仕事場へ父と二人で行って、その写真も何百枚もありますけれど、みんな図書館へ。

*天守閣にシヤチ据え付けられる(昭和三十五年一月)「完成も間近に迫った二月十日、重さ二〇六kg、高さ約二mのシヤチが天守閣の屋根上(標高一七〇m)に釣り上げられ、十五日天守閣上棟式、シヤチあげ式が挙行された。シヤチは横浜の慶寺丹長氏の作。」(前掲アルバムから)



写真10 小田原城にシヤチを据え付け 昭和35年

マグネシウムを焚く
これはお盆の線香まつりの写真です(写真11)。私の二十代に撮ったものですが、左からマグネシウムを焚いてるんです。シヤッターを開放にしてマグネシウムを光らせて影をつくっているんですね。正面から焚いたんじゃない、夜の感じが出ず、なんにもならない。

ネジを巻く前にここへマグネシウムを入れて、点火は下に輪っばがついていまして、それを引くと石打のバネが外れて、そこから火花が出て発火するんですね。マグネシウムの量ですか。お匙はありましたが、こういうところは加減です。



写真11 線香まつり
(左の白濁はマグネシウムによる光) 昭和28年頃

私だけしか写してない

うちの写真とは全然関係ないんですが、小田原では私だけしか写してない写真があります。皇太子御夫妻(当時)で、撮影したのは結婚してから八年ぐらいでしょうか。場所は風祭の療養所屋上です(写真12)。ここまで行けたのは小田原では市長さんと私だけです。ほんとに一mくらいまで接近して、SPが肩をポンポンとたたいた。いけませんとは言わないですね。ただ、うまいこと言いますね、時間ですから。カメラも覚えてますけど、オリンピックの35です。固定レンズで、レンズ交換もできないけれど、そのかわりこういうときにはパッパッと写せますけどね。このときはフィルム交換の時間がないからそれほどシヤッター切れない



写真12 風祭での皇太子御夫妻(当時)
昭和42年頃

いんです。またカラーというアタマはなかったですね。

35ミリのフィルムは自分のところで一尋(ひろ)が三十枚、それを自分でマガジンに詰める。そのほうが安上がりで、だから今日は数が多いなあという、少し長く四十枚くらい無理して写した記憶がありますが、いまではもう信じられない。

幼稚園の同窓です

私たちは昭和三十一年(一九五六)に結婚しました。家内は花園幼稚園の同年なんです。その当時は知りませんでしたけれども、同窓会で卒園の写真を何年後にみたら、アレ、どっかで見たことあるのがあるなあ、私の一人おいた隣りに家内(都子、いっこ)が写ってるんですよ。

奥さんの話

古い話ですが、私は母親が早く亡くなっておばあちゃんに育ててもらったんですが、明治十二年(一八七九)生まれでした。写真を写されるのが好きで、しょっちゅう五十嵐写真館のお客さんで来ていたの。それでこのハルさん(明治十一年生まれ)とお友だちでした。おばあちゃんは早川口で旅館(入木亭)をやっていたから、ハルさんが技師を連れてしょっちゅう出張撮影に来ていたの。

午前二時三時は当たり前

私はカラーでなくて、断然白黒が好きです。だって白黒で育ったんですから。子供の頃から定着とか水洗はやらされてましたしね。実際に自分でタッチしたのは昭和二十三年からで、それからカラーが出来るまで、もう朝から晩まで暗室です。

一番多忙なときは、私がプリントしたものを現像液から停止液に入れ、停止液から定着を家内がやっただけですよ。もう半分コックリやっただけですよ。だいたい夜中二時三時は当たり前でしたから。今どきそんなこと言ったら時代が違うと言われればそれまでですかね。

暗室の床下が全部鉛の板ですから、今でも片付ければ使えるようになっていますが、デジタルの時代ですから、暗室は物置ですよ。それに今は印画紙もありませんね。

家内も年代が近いせいか、白黒がいいと始終言っています。私たちの結婚が昭和三十一年なんです。もちろん白黒です。そのときテスト的にカラーの35ミリのフィルムがあつたんで写してプリントしてくれましたよ。今みると、色がなんにもないですよ。ですから当時、カラーだけでやった人はあんまりなかったですね。

四インチ×五インチのフィルムは一般のラボが現像してくれないんですよ。このサイズを現像してくれたプロ用ラボも今はやってくれません。ですから、写しても持つて行くところがないんですよ。

写真館で撮る

私どもの写真館へ来られるお客様には、先代、先々代からずっと続いているお客様がごさいますね。例えば、元日の夕方には黙っていてもおいでになる方もごさいますし、夏になると決まってお出でになる方もおります。

最近では、成人式や七五三はお客様としての需要は少なくなりまして。ただ、写し直しというんですか、成人式用の写真を他で写してもらったがとも見られないと、それで「五十嵐に行ってきたさい」と言われて来られた方も時々ありますね。

喜寿の撮影も昭和四十六年(一九七二)からやっております。一応小田原市民だけとなっておりますが……

写真は図書館へ寄贈

父と図書館の館長さん(石井富之助さん)が懇意になりました。うちで写した写真を、写真の好きな図書館員にみせて、それを全部チェックしまして、その中でこれ

はと思うものをアルバムにして図書館が三冊作りました。

撮影年月日は、写真屋ですから全部乾板の下に朱墨で書いてありますから、これは間違いないです。乾板はないですね。図書館に行っているものもあります。これものですからねえ。

大震災のアルバムもあります。うちの父が撮ったものです。大震災ではうちも傾いちゃいましたけども、うちの仕事をほっぽりだして、もう小田原の写真を撮りまくっていました。ほとんどが父が撮ったものです。

小田原漁港は昭和四十三年(一九六八)に出来たんですが、これも出来るまで私は何千枚と写しました。その写真とネガは、全部図書館に寄贈しました。

図書館はアメリカ移民として成功した星崎定五郎さんの寄付金をもとにできたんですが、星崎さんの胸像をつくるために、熱海の別荘に父と二人で撮影に行つたこともあります。

「小田原よいとこ」というカラースライドも作りました。音楽は「オレに任せろ」と、雨宮伊之助さんです。

いつときは図書館に入り浸つて、準職員の方でしたよ。

平成二年(一九九〇)に小田原の図書館で『一枚の古い写真』という写真集を出しました。小笠原

清さんが編集されています。これはもう写真そのものを図書館に寄贈してあるんで、何に使おうと市の所有です。市が営利目的で使うなんてことは考えたことありません。

図書館には一人写真専門でやっていた人がいたんです。

あとは任せてます

小田原では写真館はうちとオービックビルの高橋さんです。以前は組合に十二、三軒は入ってました。今は、組合に入っていないくても写真の看板掲げて撮影してお金いただいているところがあります。免許や許可が必要というわけではないですからね。

私は昭和六年生まれですから、今年で八十四歳になります。写真館がこれからどうなるか、それこそ全然わからないですね。それでもあとは四代目の博に任せていますから心配はしていません。

(聞き書き 青木良一)

写真は五十嵐写真館所蔵アルバム及び小田原市立図書館所蔵五十嵐写真館寄贈写真より転載

新会員紹介

名前(敬称略) 住所

金子 不二夫 小田原市本町

千葉 玲子 東京都杉並区

高井戸東

小田原の郷土史再発見

明治二年大久保家の寺院寄進と

忠隣妾腹の子・上柳彦兵衛

石井 啓文 ひろふみ

はじめに
小田原有信会文庫の『落穂』に「御家禄土臺帳」(写し)が収載されている。これまで知られていないこともあるので報告させていただく。

明治二年は、前年九月に小田原藩主大久保忠礼が戊辰戦役の対応を咎められ永蟄居、藩も十一万余石から七万五千石に減封され、十月に支藩萩野山中から大久保岩丸(十一歳)が後継として忠良と改名して入り、この三月に版籍を奉還している。

前文と「下され米」など
「○御家禄御土臺帳」

明治二巳年十一月

今般御家禄御本高十分一を以て御分臺と相成、上々様御用途を始寺院御渡米并御佛供米、其餘御住居向御普請向等迄都而取賄候に付而者、新に中勘相立諸事相省候得共、追々諸色高價に相及候に付、都而是迄より見込立昇候積も有之候得共、実致に見

積都而活法ニ組立殘金を以、御吉凶并不時天災等の備に致置度依之巨細に取調左之ヶ條相立申候

一、寺院御渡米御佛供米等、當

巳年御家中面扶持の廉を以、格外相減居候得共、素十一万五千石の御高にて被下來候高

に候得者、此度七万五千石之十分一と相成候に付、右を以

取扱候得者本高の六厘六毛餘の渡に相立候而、相當可致候

得共本高低き處に右割合を以渡候而者、難立行儀に付、別

法左之通夫々歩合減を調申候一、竹花町伊兵衛被下米の儀者、

表拂相當の事に可有御座候に付、相除申候

一、万町浅吉の儀茂右同斷

一、江州上笠村米三俵金左衛門、同米二俵廣三郎被下の儀と御

縁も御座候事に付、中勘に相成申候

一、板橋村伊兵衛被下米之儀者右同斷
一、例年吉濱村より御初米差上

候に付被下、千津嶋より重陽餅米差上候に付、御挨拶被下等者、表拂之物に茂有之間敷事に付、相加申候

一、隔年大稻荷御祭禮之節、御代參御備物者御家禄より差出可申候
一、新御宮御宮守給金二両也、

表1 『順席帳』等が記す大久保家寄進寺院

①順席帳 享保9年(1724) 小田原市史	② 小田原御家中知行高覚 文政8年(1825) 小田原市史	③小田原分限帳 天保10年(1839) 二宮尊徳全集
高 100 石 本源寺	高 100 石 本源寺	現米 5 石 正恩寺
高 50 石 三乗寺	高 50 石 三乗寺	現米 5 石 桃源寺
高 50 石 大久寺	高 50 石 大久寺	現米 14 石 高野山 覺證院
高 50 石 永久寺	高 50 石 永久寺	現米 4 石 京都 本禪寺
米 5 石 正恩寺	現米 5 石 正恩寺	現米 8 石 三州上和田 妙國寺
米 5 石 桃源寺	現米 5 石 桃源寺	現米 3 石 三州屋尻村 長福寺
正一位大稻荷大明神御社料	正一位大稻荷大明神御社料	現米 2 石 3 斗 1 升 大坂天満 栗東寺
高 70 石外 2~30 石 福泉寺	高 100 石現米 3 石 福泉寺	御佛供米
米 30 俵金 15 両 慈眼寺	官位稻荷大明神御社料	現米 3 俵 松連寺
米 12 石 蓮上院	現米 30 俵金 15 両 慈眼寺	現米 128 俵 教學院
香林寺	米 12 石 蓮上院	現米 6 俵 東北寺
玉滝坊	香林寺	現米 5 俵 常泉寺
養託庵	玉滝坊	現米 5 俵 桃林寺
三乗寺隠居 寿永	養託庵	現米 1 俵 龍昌寺
大久寺隠居 玄又院	御給金 2 両御扶持 1 人分 新御宮守	御宿坊料
正恩寺隠居 覚翁		現米 30 俵 威徳院
		現米 25 俵 護國院

表2 小田原領内の寺院

寺院名	建立の発端	開基	宗派
蓮上院	小田原城良の祈願所	—	古義真言宗
大久寺	僧・日英の労に報いて	大久保忠世	法華宗
正恩寺	僧・信賢を信奉	大久保忠隣室	浄土真宗
紹太寺	妣春日局追福	稲葉正則	黄檗宗
本源寺	忠常(忠職父)追悼	大久保忠職	天台宗
永久寺	加納殿(忠職祖母)同	大久保忠職	臨濟宗(妙)
桃源寺	忠職姉(里見忠義室)同	大久保忠職	曹洞宗
三乗寺	不明	大久保忠職	浄土宗
慈眼寺	元禄地震被災者供養	大久保忠増	黄檗宗

入用者都而御家禄に受可申候
 一、遠州秋葉御札料并御札取諸
 雑用等者、全遠州御領以來の
 御旧縁に付、年々一度□者御
 家禄より差出可申、人員者御
 藩より被仰付候様致度候
 一、上野護國院・芝威徳院被下
 米之儀者、以來御宿坊之御用
 茂無之事に付、皆式(かいしき)
 御斷之積に付、拂相迦申候
 一、上柳彦兵衛格別御由縁も有
 之に付、被下米之儀年々米十
 五俵、中勘に相加申候

表3 小田原領内寺院、神社之分

寺院名	神社との関係	宗派
安國寺	愛宕社持	古義真言宗
玉瀧坊	松原明神社別当	本山修験
西光院	松原明神社供僧	古義真言宗
福泉寺	大稲荷神社別当	曹洞宗

表4 東京の寺院

寺院名	御供物の理由	宗派
青山学院	惣御霊前江	天台宗
下谷大久寺	惣御霊前江	法華宗
浅草桃林寺	惣御霊前江	臨濟宗(妙)
渋谷東北寺	當尊前江	臨濟宗(妙)
谷中総持院	當尊前江	天台宗
小梅常泉寺	本光院様江(忠興室)	日蓮正宗
四谷龍昌寺	栖鳳院様江(不詳)	曹洞宗
東京安祥院	記載なし(長應寺塔頭か)	法華宗か
白金立行寺	慶光院様・(忠職室)	法華宗
〃	光頭院様江(不詳)	〃
百草松連寺	壽昌院様江(忠増継室)	黄檗宗

格別御由縁も有之に付、年々
 米十五俵、宇治 上林道庵
 一、家令以下省略之
 一、御佛供米之儀、當巳年面都
 而半方に相成居、格外之御減
 に付、此上之處何分致方も有
 御座間敷候得共、猶又一□減
 に致し相成哉。」

前文は、こうしたことから、
 寺院の「御渡米・御佛供米」等
 を減額するという。
 前文に続いて、竹花町・万町・
 板橋三村の三人へ「下され米」
 とあるが、その由縁は記してい
 ない。
 江州上笠村は、二代忠隣が配
 流の際に世話になっている。
 また、上野護國院は寛永寺
 の、芝威徳院は増上寺の宿坊

であるが、今後の御宿坊料は「お
 断り」とある。「大久保家譜」
 は、上野護國院に「忠隣五男教
 隆葬」を記している。
 上柳彦兵衛と上林道庵につい
 ては後述する。

寺院への「御渡し米」など
 まず、前頁表1に①享保九年
 『順席帳』と②文政八年『御家中
 知行高覚』、③天保十年『小田原
 分限帳』の記述をまとめた。
 そして、表2が『御家禄土台
 帳』が記す小田原領内の寺院であ
 るが俵高は割愛した。
 表2の領内九ヶ寺の内、本源
 寺・永久寺・桃源寺・三乗寺・慈

眼寺は内庵であるが、同じ内庵の
 養託寺がないのは何故であらう
 か。

表1の①②は養託庵を記して
 いる。香林寺も同様である。

財政逼迫による削減であらう。
 逆に紹太寺を記しているのは
 意外に思えるが、小田原城主だっ
 た稲葉氏への敬意と推定する。

ただ、表1の『順席帳』等に紹
 太寺はない。従って、表1は寺院
 の全てを記さず、抜粋と解釈すべ
 きであらう。

正恩寺は二代忠隣室の開基で、
 大久寺は忠常・忠隣までの大久保
 家菩提寺であった。

そして、蓮上院は小田原城の良
 に位置し、北條時代からの城主の
 祈願所とされている。

表3は「神社之分」とあるが、
 安國寺・玉瀧坊・西光院は北條時
 代からの継承と解釈する。

福泉寺は忠増からであらう。
 表4は「東京社寺御備物」を神
 社については割愛して、寺院のみ
 をまとめた。

青山学院と下谷大久寺、浅草
 桃林寺に「惣御霊前へ」とある。
 教学院は忠朝(含む忠職)以降の
 菩提寺で、それらの全御霊へのと
 の意である。

大久寺は、大久保家初期の菩提
 寺としてであらう。

桃林寺(台東区寿)は、奥平信
 政次男松平家治開基で、二世浮山

表5 上方の寺院

寺院名	御供物の理由
三州 妙國寺	記載なし(本家菩提寺)
三州 長福寺	記載なし(本家菩提寺)
京都 本禪寺	涼池院様(忠隣)・ 本源院様江(忠職)
京都 歡智院	毎年御祈禱料
愛宕 長床坊	例年御祈禱料
天満 栗東寺	龍珠院様(忠真四女・園)・ 妙香院様江(忠真六女・涛)
高野山 覺證院	記載なし(墓所管理費か)
唐津 壽因坊	盆中燈油代分他
伊勢 久志本	毎年正・五・九月御祈禱料
八幡 松ノ坊	毎年正・五・九月御祈禱料
永久院	例年御合力金被下分

和尚が小田原で永久寺を開山している。奥平家との関係で、忠常室(永久院)と忠常息女(本多飛騨守室)の位牌を安置し石塔もあつたと伝えられ、奥平家の「全御霊へ」を言っているのである。ただ、過日訪ねたが品川に移転したと言われ、現存しない。渋谷東北寺(とうぼくじ)と谷中総持院は、「当尊前へ」とある。東北寺は寛文八年(一六六八)頃、忠職が酒井忠義と共に岡崎信康の位牌を安置している。総持院は、忠隣の開基であるが、忠朝が岡崎信康の百二十回忌に位牌を安置している。両寺共に「当尊前へ」は、岡崎信康位牌のためを言っている。私見であるが、忠職・忠朝共に祖父忠隣の失脚を「信康の祟り」と考えてのことと思う。

当時「信康の霊、忠世が家に崇(あがめ)すと傳へ稱す」とも(武徳編年集成)言われていた。ところで、初代忠世の創建とされる風祭の萬松院は全くない。これら文書に限らず、大久保家史料に同院との関係の記述は全く見られない。萬松院の「信康位牌安置」は、火災で焼失後の延享二年(一七四五)以降作成の同院由緒書のみである。

小梅常泉寺の「本光院へ」は、忠興・室である。四谷龍昌寺は「栖鳳院様へ」とあるが、栖鳳院が判明しない。現在では中野区中野にある。白金立行寺は、大久保彦左衛門家の菩提寺である。同家との交流は維新まで続いていた。慶光院は忠職・室であるが、光頭院が判明しない。

百草松連寺の壽昌院は忠増継室で忠方の育ての親である。なお、東京安祥院は現存しておらず、伊皿子長應寺(忠世四男忠成等葬る)の塔頭にあり、その関係だろうか。最後は、上方の寺院で表5にまとめた。三河の妙國寺と長福寺は大久保本家の菩提寺である。京都本禪寺は、京都

の大久保家菩提寺で、涼池院は忠隣、本源院は忠職である。京都歡智院は、東寺院家の塔頭で別格本山である。

愛宕長床坊(ながとこぼう)は京都愛宕神社の宿坊で、後述する。天満栗東寺の龍珠院は忠真四女・園で、妙香院は忠真六女・涛である。僅か二ヶ月の間に二人が亡くなっている。

高野山覺證院は寛永年中(忠職の時)からの大久保家墓所の管理寺院である。そして、唐津壽因坊は忠朝墓所の墓守であるという。

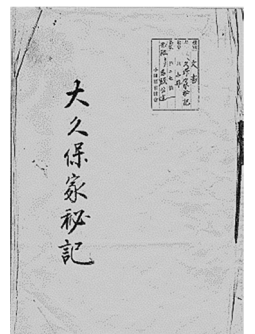
伊勢久志本は、伊勢神宮の権禰宜本家であるが、大久保家との関係は分からない。八幡松ノ坊は諸書に見えるが、山城離宮八幡宮の宿坊だろうか。これも関係は分からない。

忠隣子・呉服商上柳彦兵衛

上柳彦兵衛と上林道庵は、前文で格別の由縁があるとして「下され米」を記している。この上柳は、大久保忠隣(忠子)で、『大久保家秘記』が記している。

「忠隣力葦子上柳氏ト称セシ事

同(天正)十九年辛卯、治部少輔忠隣京都逗留ノ間、妾腹ノ男子生ル。其比上柳宗有モ京都ニ在テ、治部少輔忠隣へ懇ニ出入セシユ



へ、其葦子(げっし)タル驗(あかし)トシテ相州秋廣ノ刀ヲ添へ與へテ、宗有方へ預ケ置キ、京都ニ於テ養育セラレ、十六歳ノ時江府へ来リ、治部少輔力屋敷ニ居住シ、是ヨリ先キ大久保ノ氏ヲ避テ上柳彦兵衛正胤ト(後、甫齋ト称ス)名ツキ、廿二歳ノ時、大神(君)ニ召出サレ、兼而養父トセシ宗有願之通、宗有家督ヲ相續セシメ、呉服御用調進ノ事ヲ仰付ラレ相勤メ、延寶三年乙卯八十五歳ニテ病死ス(法名ハ本源院甫齋了空ト號ス)。其子上柳彦十郎、其子同彦兵衛、其子同松次郎(彦十郎從弟平次郎後見シテ家督相續ス)上柳宗有ハ始メ彦兵衛ト称シ、參州岡崎ニ在テ大神君へ昵近シ奉リ、五十人扶持ヲ拜領シ、後チ京都ニ赴キ住シ、撰州大坂ノ役ノ時ハ毎度御陣所へ召連ラレ、昵近シテ御咄ヲ申上ケ、又ハ其後伏見城へ伺候シテ御茶ヲ顯シ、御前へ獻シ御茶湯ノ席ニ侍リシ事アリ。是ヨリ先キ慶長十七年壬子上意ヲ以テ三千石ヲ賜リ、御旗本ノ列ニ召加ヘラルベシト有リシカ共、辞退

ヲ申上ケ、京都ニ在住シテ呉服御用ノ事ヲ相勤メ、永ク子孫ヘ相續セシメ度ノ由ヲ申上シトナリ。毎度御懇ノ上意ヲ以拜領物仰付ラレ其品子孫今ニ傳ヘ存セリトナリ」

孽子(げっし)とは、妾腹の子である。天正十九年(一五九二)京都生まれ、とある。小田原合戦の翌年である。京都の呉服商の養子になったという。

『大久保家譜』(岩瀬家文書)に、忠隣の子「十二正胤、称上柳彦兵衛後号甫齋爲呉服師上柳宗有養子」とあるから、忠隣の十二番目の子供として認知されていることが確認できる。『デジタル版日本人名大辞典』も記している。

「上柳甫斎 天正十九年生まれ。京都の呉服商。徳川家康に仕え側向御用を勤める。傍ら小堀遠州に茶道を学び、呉(あがた)宗知(茶人・庭師で幕府御用庭師も勤めた)に教えた。延宝三年七月二十六日死去、八十五歳。通称は彦兵衛。別号に梅園堂・独月庵。著作に『遠宗拾遺』がある。」

延宝三年(一六七五)に八十五歳で没した。その家に大久保家は明治二年まで二百年余、「下され米」を提供し続けている。

元禄三年(一六九〇)刊『人倫

訓蒙図彙』(じんりんくんもっずい)の記述が面白い。

「呉服や 應神天皇の御時、唐土(もろこし)より呉服綾織(くれはあやは)といふ兄弟の女わたりて絹を織れり。此名によそへて上品(じょうほん)の着物を呉服といふなり。呉服や。」

(中略)
長者町通、上柳彦十良、本石町二丁目、甫斎といふ。其外室町を始、所々にあり。江戸は本町、石町。大坂は本町、伏見町。(後略)」

呉服屋は、呉服(くれは)と綾織(あやは)という姉妹から、上質の着物を呉服と言うようになったという。

そして、著名呉服屋六名の京都と江戸の住所を記し、上柳彦十良は京都は長者町通り、江戸は本石町二丁目、甫斎とも称したとある。

また「上柳金襴」という名物織物の一つは、茶地に金糸で七曜文と龍丸紋を織り出した金襴で、「逢坂金襴」や「雲山金襴」の色変りで、江戸初期の京都の呉服商・上柳甫斎の所持に因んだ名という。

中国明代初期の裂という唐物「宇治文琳」の仕服に用いられ、「うえやなぎ」とするものもあるという。

茶師上林道庵と長床坊

茶師とは、元来茶の生産・製造を業とする者で、江戸時代の茶師という宇治の御用茶師を指し、三仲間茶師があった。

上から御物(ごもつ)茶師・御袋(おふくろ)茶師・御通(おとう)茶師の三ランクで、上林道庵は御袋茶師九名の一人であった。ちなみに文化年間で御物茶師は十一名、御通茶師は十三名であったという。

上林道庵がある公家に納めた茶壺の記録に『御茶入日記』(本願寺史料)がある。

その記述に長床坊は、愛宕山の坊院の一つで、「茶壺を愛宕に預ける」、あるいは「壺を上げる」といつて、毎年収穫後は、茶壺を愛宕山の茶壺蔵で保管するのが通例で、こうした実務を坊院が担っていたと推測され、毎年五、六月に愛宕山に茶壺を持って行き、九月に取りに行く。その実務は上林道庵が全てを仕切っていたという。

そして、『宇治茶』は諸大名の茶御用も勤め「諸侯は茶を嗜むも嗜まざるも嘉例として悉く宇治の茶師に茶の調進を命じ、且つ茶師を遇することに甚だ厚く、中には扶持を贈り、又は一国売と称し、其の領内に於ける専売権を与えるもあり」という。

おそらく、上林道庵は大久保家

茶御用商だったのであろう。

先の上柳甫斎も一流の茶人であったことは史料で分かるが、道庵との接点は見出せなかった。

まとめ

領内寺院に萬松院がなかったのは驚きである。

領内十三ヶ寺、東京十ヶ寺、唐津・伊勢を含めた上方十一ヶ寺で、総計三十四ヶ寺にも及ぶ寺院と、明治に至るまでの交流もまた驚きである。

そして、上柳彦兵衛は『大久保家秘記』で承知してはいたが、今回調べた少ない史料からでも相応の人物と知れる。

上林道庵も著名茶商として名を残している。では何故、「下され米」を受けていたのであろうか。判然とはしないが、宇治の茶商は大名相手の商売で、一般客を相手にしなかったため、江戸後期は衰退に歯止めが掛からなかったという。こうしたことが影響しているのであらうか。

関連史料を探したい。

小田原桐座について(三)

— 由緒書の検討を中心に —

荒河 純

二、桐座と女舞について

(一)女舞、女歌舞伎の禁止

これまで、戦国時代から江戸時代初期の小田原桐座の成立と江戸時代中期頃までの江戸桐座との関係を中心に述べてきた。この章では、江戸時代全般にわたる女芸人への厳しい取り締まりに対して、桐座が女舞を続けることができた要因について述べる。

慶長の頃より、女歌舞伎の太夫を中心として、武士の間、町人の間で喧嘩沙汰が続出した。しばしば、女歌舞伎に対して退去命令を出すなど、部分的な禁止や追放の措置は行われてきたが、一向に治まる気配がなかった。そこで、幕府は女歌舞伎が社会の秩序と風紀を乱す根源となっていると見なし、本格的な統制に乗り出したのである。

そして、最終的には三代将軍家光の時代に、封建制の確立と綱紀粛正の施策の一環として、女優、女芸能人の全面禁止にまで及んだ。『歌舞伎年表』寛永六年(一六二九)の条に次のような記載がある(1)。

○十月、女舞、女歌舞伎等御制

禁。(此時女浄るりも制禁さる)

十月廿三日、島田彈正忠殿達。一、此頃府下に於て女歌舞伎惣踊等致候義堅御制禁申達候に付、以来相止可申事、但三人限り組合申間敷事、女舞并おどり等の中へ男兒打交り候事、是亦相止可申事。

また、同七年(一六三〇)には以下のように記されている。

○十二月、芝居興行之儀、是迄男女混交之儀も有之旨相聞以之外之儀に付、以来無用之旨嚴重之御沙汰有之、興行主一同調印之上受書差出す。十二月十三日、堀式部少輔殿達し。

一、芝居小屋に於て男女打交りにて致候義有之、以来前年申渡の通り女人は一切出申間敷仕手人より厳敷申付、不相背様可心得候事、但仕手人より抱入之名前可差出事。

これらの禁令が発せられるきっかけとしては、先に挙げた、

寛永六年(一六二九)、寛永七年(一六三〇)の桐大蔵がおこなった男女打ち交じりの興行も、一役買っているといえるだろう。従って、これ以降女舞の桐大蔵一座の活動については、幕府から常に厳しい目で見られていたものと推察される。

また、同業者の見方も商売敵とはいえ厳しいものであった。例えば、先に挙げた享保十九年(一七三四)の桐大蔵が町奉行に興行願を提出した際、町奉行への意見書として提出された森田勘弥の文書が遺っている(2)。

(前略)然處今般桐大蔵所々にて女歌舞伎座興行仕候様由緒書を以申上候段難心得奉存候、尤小見せ物、子供物真似、辻放下之類者宮地寺地にて十日切、廿日切、或ハ五十日、百日切と申草芝居仕候由承及候右之大内蔵所所にて歌舞妓大芝居仕候段不承及び候以上

このように、女舞をこの時代に継続していくことは決してたやすいことではなかったであろう。それを継続していく原動力となったのは何だろうか。

(二)桐尾上の舞

まず、小田原桐家に伝わる桐尾上の舞とはいかなるものであったのだろうか。実際の舞の型は現在に伝わっていないため、『歌舞伎年代記』に載っている江戸桐座の桐長桐の絵姿(図1)(3)、勝川春章筆による天明四年(一七八四)興行の「桐大内蔵の舞の図」(4)、嘉永二年(一八四九)の桐尾上による桐座興行のちらしに描かれた絵(図2)(5)などと、わずかな文書から想像するのみである。

『新編相模国風土記稿』に、衣裳や舞の様子を伝える以下の一文が載せられている(6)。

中古冷泉家より、職業の事尋ありし時、呈せし答書の案、今にあり。桐尾上烏帽子水干にて舞臺に出床机に踞し、相傳の謡歌を謡ふ、傍に頰白の老叟、素袍侍烏帽子にて太



図1. 『歌舞伎年代記』の桐長桐と思われる絵図

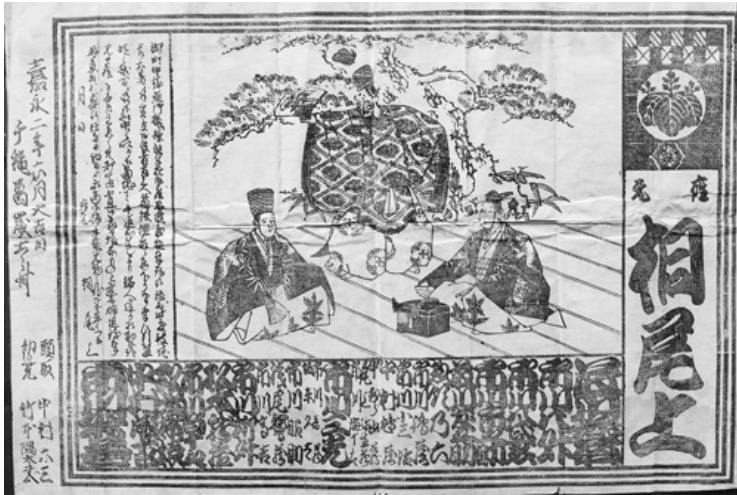


図2. 嘉永二年の小田原桐座興行ちらし(南足柄市荻野・武井延禎氏蔵)

鼓を打是に和す、是を尾上の舞と名づく、別に舞蹈するにあらず。

舞なのに舞踏しないとはどういうことであろうか。これを理解するには、桐尾上の舞の基本となった幸若舞がどんな舞であったかを知る必要がある。

幸若舞を生みだした幸若家は信長、秀吉、家康らの愛顧を受け、十分に取り立てられた。その格式に合わせて筋目をできるだけ尊貴なものにしようと苦心

し、系図を改変して芸能の家であることを隠蔽したといわれる。近い存在であるはずの、舞々や大頭とも区別するため、「舞」という名が付けられながら舞ったことは無いとまで言い切ったという(7)。

しかし、こうした態度は芸能者にとつては自殺行為であり、これが一つの要因となって急速に芸の場が限定され、やがて衰滅していったのであろう。

現在、幸若舞の名で唯一伝承されている、大江(福岡県三門郡瀬高町大江)の幸若舞は、幸若

家が別だと言いつ張った大頭舞の系統であるが、ある程度は参考になるだろう。その芸態は以下のようなものである。

舞手は三人で、太夫は立烏帽子に素襦、長袴に小さな刀をさし、手に扇を持つ。シテ、ワキも同様のいでたちだが、烏帽子が折烏帽子である。楽器は小鼓一挺にすぎない。技らしい技はなく、両手を左右に開き、あるいは扇を開いて手を両脇につけ、足拍子を踏んだり、シテ、ワキの前を往ったり来たりするだけである。能のように一人が一役を担当するのではなく、適当に詞章を分けて語り謡

うにすぎない。

この大江の大頭舞から在りし日の幸若舞を想像するしかないが大頭舞が三人に対して幸若舞では二人で行われ、やはり謡い、語りと足拍子に特徴があったものと考えられる。

このように、踊り念仏、風流踊、ややこ踊、おくに歌舞伎と展開し、より官能的なかたちになつてきた歌舞伎の系譜と、幸若舞とは明らかに異なるものであつたと見ることができ、官能的な女歌舞伎踊が為政者からみて風紀を乱すと見做されていったのに対し、幸若舞は武家の規範に沿うかたちで受け入れられたのではなからうか。小田原桐家が幸若舞を表看板にしていたことも、女芸能を継続できた一つの大きな要因と考えてよいだろう。

一方、江戸桐座の場合も、桐大蔵あるいは桐長桐が、幸若舞を基にした「馬揃那須与市」などを披露していたのは変わりないが、江戸三座の控櫓という立場上、狂言芝居(歌舞伎)を前面に打ち出さざるをえなかった。江戸桐座が幸若舞伝統の紋である五七の桐を使い、小田原桐座は五三の桐を使っていたのは皮肉なことである。

諏訪春雄は、前章で引用した『松平大和守日記』の元禄六年

五月六日、白河で上演された女舞の桐大蔵一座には、若太夫、女形、敵役、丹前、どうけなどの歌舞伎役者が多数参加し、出し物の大半は舞曲以外の狂言などであると指摘している。このことから、女舞の一座には歌舞伎役者が加わり、やがて、女舞を圧倒して、歌舞伎が優位を占めるにいたると述べている(8)。小田原桐座が半ば藩の公的な役割を担っていたのとは大きな違いと考えられる。

(三) 小田原藩主の庇護

では、歴代小田原藩主と桐家の関係はどうだったのだろうか。前掲の『新編相模国風土記稿』には「(前略)右女舞の義北條家、在城の時より、女にて代々相續仕、城主吉事有之時、爲祝儀興行仕候、小田原城主の嘉儀ある毎に、音曲舞を興行するを例とす」とある。

また、次の章で詳しく述べるが、天保改革で一切の興行が差し止めになり、その後水野忠邦が失脚した後の弘化四年(一八四七)に出された歎願書の中に、「御殿様御代替之節は御目見被仰付女房桐尾上儀ハ装束仕舞臺ニおゐて舞興行仕候節之姿に而御城江罷出御目見仕候」という表現があるのは注目される。すなわち、大橋家の当主と桐尾上が舞

台衣裳のままで藩主に御目見したということである。この歎願書は正式に寺社奉行に提出されたものであるから、間違いのないことであろう。

また前述の松隈匡輔は以下のように記している(9)。

(前略)然らば幸若の同流なる尾上舞が格式を有し大久保家一の年賀には同家が筆頭で、同家からの賀禮がなければ他の臣下達の賀禮を受附られなかつたそうで、その時は帯刀を許された事を現に大橋定三氏の母堂も話されてをる。

一般に河原者といわれた芝居小屋の座主がこういうかたちで藩主に拝謁するのは異例のこと、桐家はそれだけ優遇されていたことを意味している。江戸や上方において、女舞を含む女芸能人の出演に対して厳しい禁令が出されていたにもかかわらず、小田原ではそういう史料は見当たらないばかりか、このように藩主に優遇されていたのはどういうわけだろうか。

先に小田原桐家は五代藩主であった稲葉正則の時代に小田原定住したという推論を述べたが、その後の稲葉正通、大久保忠朝、忠増と、五代から八代藩主までの全てが藩主時代老中であつたか、

老中経験者である。すなわち、江戸中期(一七二〇年頃)まで、小田原藩主は代々幕政の実力者であつたという事実である。これは、江戸への権力の一極集中を基本政策とした幕府にとつて、関東西縁の要害として小田原藩がきわめて重要な位置を占めていたことを物語るものである。

実力者藩主の庇護の下で、小田原桐家は、小田原萩窪村寺町に常設の芝居小屋を持ち、かつてのように諸国を巡業することもなく、順風満帆に家業を遂行していたと思われる。

しかし、十八世紀に入り天下泰平の世になると、要害としての小田原の重要性は減つた。その上、小田原を含む西相模地方では前述したような天災が立て続けに起こつたため、小田原藩としても被災からの復興が最優先課題となり、藩としても庶民生活も芸能を楽しむ余裕が無く、小田原桐座にとつても厳しい経営環境になつたと推察される(10)。

また、寛政十年(一七九八)には、この頃関東在方に横行した「通り者」と呼ばれる無頼集団の掃討にかこつけた百姓の風俗取り締まりを目的とした、取締役設置令が施行された。続いて文化二年(一八〇五)には関東全体のさらなる治安維持強化を目

的として、勘定奉行の支配下に関東取締出役、通称八州廻りが創設され、さらに文政十年(一八二七)にはその下部組織として寄場組合が整備された。

その際、小田原藩領は「改革御手限り」ということで、水戸藩、川越藩とともに寄場組合の設定を免除され、基本的に関東取締出役の関与も受けず関連法案の伝達も「別達」とされた。

ただし、小田原藩で何もしなかつたわけではない。この頃の藩主、大久保忠真は、小田原藩から久々の老中になると、藩の財政改革の断行に着手した。その中で取締組織として、小田原独自の組合取締役を設置した。これは幕府の方針に呼応するといふより、自藩の財政と村や地域の秩序改革を目指した藩政改革の一環として位置づけられるものであつたが(11)、いずれにしても、桐座にとつては、十九世紀に入つても厳しい劇場運営が続いていたと想像される。

すなわち、小田原桐座に対する藩主の庇護は、桐座が小田原に定住した前後から、十八世紀初め頃までは確かにあつたが、その後頻発した災害等による財政悪化、幕府の風俗取締などの影響を間接的にも蒙ることで、実質的な庇護は徐々に薄れていったものである。こうした困難

な情況に立ち向かい、自らの座格の維持を図る目的で、由緒書が作られたと考えることができよう。

このように、小田原藩主による桐座の庇護は、実際には江戸時代を通じてではなく、江戸時代初期から中期にかけてであつたと推定される。しかし、女芸人に対する禁制が最も厳しかった時期に、藩主がこれを認め優遇すること、小田原桐屋上の女舞は巷の女芸人のものとは一線を画す、という通念が形成されたと考えられる。

(四) 神事舞太夫ネットワーク

舞太夫の家業を継続していく上で、藩主、領民との関係以外に、他地域同業者との横の関係は無視できないものである。桐家の「女舞太夫」は他に類例が無いのは先に述べた通りだが、大橋家が代々名乗っている「音曲舞太夫」についても他に類例が無く、今のところ独自のものとしか言いがたい。

しかし、もう一つの神事舞太夫に関しては少なくとも関東全域に存在し、これに関する研究も多い。

相模国における神事舞太夫に関しては、林淳、橋本鶴人などの研究が知られている。林淳によれば、相模国では主要街道で

あった東海道と矢倉沢往還道沿いに神事舞太夫家が点在し、大きくは小田原グループ、六所明神グループ、愛甲村グループに分けられるとしている。このうち、小田原グループには天十郎家、大橋家がある。

天十郎家は十六世紀後半より北条氏の庇護を受けて小田原で最も勢力を有し、関八州の総元締めのような役割を果たしていた。また、天十郎家が対外的な社交用に動員され、その対価として領内の陰陽師などから役銭を徴収する権利をあたえられていたとしている(12)。

これに対し、大橋家は吉兆、吉事の時の法楽舞を主とし、勧進興行を経済的な基盤とし、女舞の披露によって城主に仕えていた。このように、北条時代には、明らかに天十郎家の方が大橋家より厚遇されていたと言える。

ところが北条氏滅亡と共に天十郎家は弱体化し、辛うじて北条稲荷の神主として存続した。

これに対し、大橋家は玉繩北条氏に仕えていたため生き延び、その後、小田原藩主の庇護を受けるようになったことは前述の通りである。大橋家の隆盛に関して、『新編相模国風土記稿』の次のような記載がある(13)。

○神事舞太夫大橋六太夫江戸

浅草田原町田村八太夫配下なり、祖銀太夫政氏は、音曲舞太夫なりしが、元禄七年家職を智及女に譲りて(音曲舞太夫の條に詳なり)、別家となり、同十六年神事舞太夫となれり、(後略)

寛永七年(一六三〇)頃活躍した銀太夫政氏が、元禄十六年(一七〇三)まで生きていたとは考えにくいので、神事舞太夫になったのはその子か孫の代であると思われるが、音曲舞太夫の大橋家、女舞太夫の桐家の他に神事舞太夫の大橋家が存在したのは事実である。三人の舞太夫を擁すること、大橋家は基盤を強固にしたものと考えられる。

一方、関東全体を見ると、江戸時代に入り徳川家康が三河から連れて来た幸松勘太夫が関東全体の芸能集団支配を強めて、それ以前に隆盛を誇っていた幸若舞系の舞太夫や舞々のほとんどは消滅した。またさらに幸松家は、古くからあった、戎社人、山伏、土御門家との間で争論を起すことで他集団の力を次々と削いでいった。しかし、元禄年間に、幸松家は不祥事によって退き、これに代わって幸松家の手代であった田村八太夫が実権を握った。そして間もなく神事舞集団として関東全体をその

傘下におさめたのである。

田村八太夫の権力は強大で、天保年間以降、神事舞太夫集団の中で取締出役、組頭などの組織機構を整備し、従来無かった舞太夫の広域ネットワークを形成した(14)。田村八太夫は幕府の関東取締出役を模倣することで配下の統制強化をはかると同時に、公権力の直接介入を避けることを狙ったのではなからうか。

小田原大橋家は、分家を神事舞太夫家として広域ネットワークに参加させることで、そこからの情報を得つつ、音曲舞太夫家や桐家には直接その支配が及ばぬように工夫したと言える。

注

- ① 伊原敏郎『歌舞伎年表 第一巻』岩波書店、一九五六年
- ② 伊原敏郎『歌舞伎年表 第二巻』岩波書店、一九五七年
- ③ 立川焉馬『歌舞伎年代記』歌舞伎出版部、一九二六年
- ④ 石井富之助『神奈川県史』各頁編三、神奈川県、一九七〇年
- ⑤ 中根賢『小田原市史』通史編2・近世1、小田原市、一九九九年
- ⑥ 蘆田伊人『大日本地誌体系 20・新編相模国風土記稿』第二巻、雄山閣、一九七五年
- ⑦ 荒木繁『幸若舞1』東洋文庫、平凡社、一九七九年
- ⑧ 諏訪春雄『女舞考—宮川長春筆「風俗図巻」を中心に—』『学習院短期大学国語国文学論集』第六巻、一九

七七年
⑨ 松隈匡輔『桐座』『小田原の史実と伝説』特輯号、求信書局、一九二〇年

⑩ 阿部昭『近世中期村社会の動揺とその再編—小田原藩領西相模地方の地域社会の構造を中心に—』

『おだわら—歴史と文化—』八号、一九九五年第八号、小田原市役所市史編纂室、一九九五年

⑪ 馬場弘臣『小田原藩における近世後期の改革と中間支配機構』『おだわら—歴史と文化—』前掲書

⑫ 林淳『相模国の舞太夫集団の展開』『愛知学院大学文学部紀要』一九九八年

⑬ 蘆田伊人『大日本地誌体系 20・新編相模国風土記稿』前掲書

⑭ 林淳『相模国の舞太夫集団』『地方史研究』第七四号、一九九八

会員の方へお願い

—新規会員募集—

小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方には是非会員になっていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千円です。

小田原市堀之内三二一—五
電話 ○四六五—三七七—一八八

植田士郎

片岡日記 昭和編(四)

片岡 永左衛門

昭和二年 五月

一日 晴

七時湯本小室翠雲画伯別荘に蘇峯先生を訪ひしニ大喜ひにて老妻は片岡さんは銀行の動揺で御多忙ならむと申せと、なに片岡さんの銀行は此度は安定のはつ。それに片岡さんの領分に来て無断で史跡を探りてはと大笑し、早速先生夫妻、秘書並木仙太郎氏、翠雲氏不在にて同家の僕と余五人にて自動車にて出発、長尾峠の富士を見て箱根高原の春色を行々賞し途上の早蕨を手折らむと車を下るれば、雉子の鳴を聞きて

箱根ちのわらひおらむとおり立は

一声へたかくき、すなくなり

湖尻より船に乗れば、湖岸は新緑の間に躑躅残桜の咲き乱れ賞辞を絶の間もなし。箱根ホテルニ中食し、箱根の関趾、興福院の観音を拝し箱根神社に至れハ、早山社司も来り宝物を観覧、自動車にて小室氏ニ帰着。入湯すれハ甚たよし。止めらる、俣に一同と止宿。

先生途中の詩を示さる、

断崖絶壁幾人家 新樹蒼々石洞斜

五月函山詩境好 老鶯啼處有桜花

函山吟行片岡氏正 蘇峯迂人

二日 晴

暁に夢覚めて

晴れかしと祈りし床の夢さめて

雨かと聞けは谷川の水

八時自動車にて出発、小田原にて人力車に乗替、小田原城跡、御幸濱、報徳社、蓮上院にて西光院所蔵の松原神社本地佛十一面観音を拝し古文書を見て荻窪村寿昌寺古鐘をも見、飯泉勝福寺ニ至り古文書及び秘佛の観音を拝し、そはの馳走となる、午后は上府中千代の北町にて古瓦の破片を採取す。此地ハ*①定額寺又ハ是に准したるものと思はる、の跡なり。夫より下堀の城跡を見る。拙者は城跡説に返し(反し)*②師長国の廳趾となすもの。先生も然らむと。鴨宮停車場にて一行と東西に別れ三時半帰宅。

*①律令制下での大寺・国分寺と並ぶ寺院制度(『国史大辞典』)

*②片岡著「相模師長国府考」昭和三年)「師長国の廳址考」(『足柄史料・昭和三年』)参照。

三日 雨

大雨、尾崎ニ立寄、四時半帰宅。

四日 晴

五日 晴

六日 晴

支店建築地交渉の処、漸く本日登記済。

七日 晴

細君同道、江の嶋渡辺傳七氏往訪。優待受鎌倉ニ廻りしニ八幡宮八目下修繕最中。六時半帰宅。

八日 晴

佐々木氏往訪

九日 晴

十日 晴
昨夜板橋に出火

十一日 晴

十二日 晴
昨夜又々板橋に出火

十三日 曇

午后五時より塔之沢還翠楼にて當地銀行同盟會ニ出席、九時帰宅。

十四日 雨

十五日 昨夜の雨晴

佐々木庄三君と七時四十分急電にて海老名国分寺にて下車、史跡天然紀念物保存協會の相模国々分寺遺跡見学の一行に加る。

清水寺国宝千手観音を拝し一同と海老(海老名のことか)耕地より大山連山をなかめながら芝生にて一同中食す。午后□雨来る。役場楼上より其晴てむして急曇り急晴れ心色極り無きの雨景を賞し国分寺の跡を廻り薬師如来を拝し、六時に乗車し七時過に帰宅。本日、細君も下女みよと最乗寺に参詣。

(この後五ページにわたり『国民新聞』(昭和二年五月十一日〜十七日付)の切り抜きが貼ってある。蘇峯「長興山莊遊記」という記事。日記一〜二日のこと。)

十七日 晴

支店新築ノ件ニテ本店ニ至り、三時帰宅。

十八日 雨

藤館の新旧町長送迎會ニ出席、九時帰宅。

旧町長今井廣之助氏ハ政事ニ趣味を持た人て、町村制の施行前より拙者と共ニ小田原町聯合

會議員となり施行後も當撰して総て同歩調で来たか面白議論を立てる人たか何と無徳望か薄ひ。夫は理屈か多ひ為ても有るか中々するい処も有る。

第一回の町長當撰ハ返(反)對者多く骨か折た。其時には懇請止を得ず今井君の任期前二退職するの条件で承諾した。其後に氏ハ縣會議員を希望し拙者に無断で辞表を提出したので条件も考慮も水泡に帰して後に残された。

果して後任町長に議員一致して勧告せられしを辞し今井君ヲ押(推)たか物にならず、加藤定通君を拙者ノ指名で當撰し、助役ノ後任も拙者ノ指名で岩田尚恒君となり加藤君の任期となり今井君を押たか駄目で岩田君か町長となり、岩田君の任期となり、其不人氣二付込て今井君か或ル者に運動させたか、是か悪感を来し岩田君か再撰した。財政の都合も有りしか種々細工をして真鶴の有給町長と成た。

又岩田君の任期か来て種々運動の末に岩田君には何とかすると云事となり、自発的に表面辞さして小田原町長の返り花を咲せた。議員中にも面白からぬ者を生したか震災直後の為に再撰した。此面白からぬか元で、昨年から町長に辞職さする問題か持上り拙者も友人として相談有りしも是に介在を避けたか、今井君も辞任を承諾したと聞しか、後任には程ヶ谷町か横濱ニ合併し其町長の*吉田君に白羽の矢か立て一部議員より相談を持たたか、是に返(反)對して論入不可説か持上て又々議員間の紛議となつたか、是は数に於て不足で吉田氏ニ一決した。此返(反)對も今井君か例の通り糸を引たと云人もある。

今後起る問題は今井氏の報酬問題で、一部ハ長年在職したか実業銀行の預金問題で何にしてても此一件ハ失敗で多額の支出は不同意で有ると云議員も有り、夫ハ夫、是ハ是たと一部は主張もするか是にも何かの臭ひかある。今井君には何処にか野鄙な性質か有り、在職中に何時も自分の報酬を引揚げ、自分は再撰を迷惑と云ながら種々の運動や暗き一面か附き纏ふ。

席上にて吉田淳一新町長ニ面会したか、人物か大きひのか又は人を喰て居るかへんな感じかした。

*この月の七日に吉田淳一(元保土ヶ谷町長)が小田原町長に就任している(『小田原市史年表』)。

十九日 晴

廿日 晴

外国語学校附陸軍中佐竹中宇太郎、小田原史跡ニ付来談。桜馬場ニ全行。

廿一日 晴

廿二日

東京ニ芳子と同行、荒井医師ニ立寄、親一方にて芳子と別、新宿ニ時式十五分發にて海老名国府にて下車、学校ニ至り板碑を受取り五時半帰宅。

廿三日 晴

午后より出勤

廿四日 晴

廿五日 晴

宮ノ下ニ出張。湯本福住ニ立寄、九時帰宅。

二十六日

二十七日

二十八日 晴

午前十時より小田原中学校ニテ*北条時代の小田原城関する講演をなし、午后より出勤。

*片岡著『北条氏の小田原城址』(足柄史料)参照

二十九日 晴

七時發ニテ上京。鶴巻ニテ下車、箕輪の小駅趾を尋ね再度乗車。親一方ニ立寄、午后荒井医師ニ至り、夫より上野寺ニ吉川先生の墓參。帰途美術学校ニ推古會展覽を見て、四時過ぎ親一方ニ帰宿。

三十日 晴

午前九時吉川講社ニ出頭、社長心得大橋坦先生より淘宮皆傳免許状ヲ授与。了テ神酒ヲ頂戴す。立會、伊東之菟、安井□□、大西一清ノ三先生。帰途靖国神社ニ立寄、神宝常宮、周宮兩殿下御染筆ニ付詳細承り二時半發にて帰宅。

留守中、中学校ヨリ一昨日講演の謝礼トシテ楠の文庫を贈らる。

三十一日 曇

六月

一日 晴

明治三十八年五月、日露戦病死者ヲ靖国神社ニ合祀有リシニ、*竹田宮・北白川宮兩大妃殿の未御入輿前にて小田原御用邸ニ御成中ナリシニ、新に祭場ヲ設ケ拙者も參拜セシカ、其時ニ拜見セシ宮の御染筆並ニ縮緬の御幕ハ其後如何ニ相成シカ、願ハ靖国神社ニ御奉納ニも相成、其徳を後世ニ傳へ度ト、去ル三十日宮司ニ面會ヲ求メシニ不在ニテ、岡富氏ニ面會セシニ殿下ノ御染筆ハ御奉納ナリシモ御幕ニ就テハ即答成兼る趣ナリシニ、別紙の通り本日申来り萬足の至りなり。

前略

昨日御尋ね相成候縮緬御幕ハ、當神社宝物として鄭重に格納有之候間、左様御承知相成度、此段御通報申上候也

昭和二年五月三十一日

東京九段上

靖国神社々務所

岡富照本

*「竹田宮北白川宮兩大妃殿下と小田原の教育」
〔明治小田原町誌〕下巻五月三日、『足柄史料』
参照)

二日 晴

當町*水道布設発起人之件テ来談。

*同年十一月二十八日、町会協議会で小田原水道の町営を可決している。

三日 晴

四日 曇

寒々し

五日 雨

午后より久々にて淘席。

六日 晴

七日 晴

白井新太郎・尾崎亮司来訪水道布設願書二調印。

一昨日出勤の途中にて

街路樹のかけもおほろに行人の

かさ白しらと五月(雨)のふる

先日電車にて

箱根山すそわに黄はむ畑見へて

いろとりくりに初夏の野道

八日 晴

午后より国府津小宮氏淘席ニ出席。

九日 晴

十日 晴

行用ニテ区裁判所ニ出張。

午后北条時代の小田原城の一綴を堀江氏ニ質す。

十一日 晴

此程調査の小田原町戸数人口、五月末現在、戸数五千七百七十六戸、人口貳萬五千拾六人、男一万二千四百十九人、女一万二千五百九十七人、内緑町戸数

十二日 晴

堀端にて

ところく崩れし城の石垣を

のこして高くしける夏艸

十三日 晴

十四日 晴

山田より来状ニ付掛ニ立より庭内を見歩る
き茶の馳走ニなる。本店より支配人来り、十時自動車にて出発、堂ヶ嶋森方にて中食、出張所に立寄、予定の借家見て、帰りハ湯本早雲寺に竹内を尋ね、停車場迄支配人を送り、八時帰宅。

十五日 晴

十六日 雨

十七日 晴

十八日 晴

近来當地も非常の不況にて、簡易保険ノ當地郵便局の取扱口数ハ凡七千口にて、少ハ壹口

壹ヶ月五十錢、多ハ壹口四円五拾(錢)迄なる

か、毎月滞無拂込数ハ六割にて、他の四割ハ拂込の後れ数ヶ月ニ渡り、失効なすも有りト。

十九日 晴

午前七時、細君と出京、親一方ニ立寄荒井医師ニ行く。帰途、*旧領主大久保子爵邸ニテ執行の大久保忠隣公三百年忌記念講演ニ出席。旧藩士の縁故者三三百余通通知を發したりと聞しニ、會する者三十人ニ満す(ず)。黄金多からされは交り薄しの反意か。

*平塚市諏訪町の大部分が大久保家の所有地だった。大正時代に一部が宅地造成された(『平塚市郷土史辞典』)。

廿日 晴

廿一日 晴

廿五日 雨

鎌倉伊東之菑先生定會ニ參會、午后六時帰宅。

廿六日 雨

国府津小宮氏御傳の件にて来談。

廿八日 晴

六時より国府津小宮氏方へ御傳ニ出行。

廿九日 晴

午前、本店ニ出張。六時より国府津小宮氏ニ行。

三十日 晴



2015年8月



1968年2月

最初は小田原駅舎の今昔です。旧三角屋根の駅舎は大正9年(1920)に建てられ、その後、関東大震災で半壊しましたが、崩落は免れ大改修で元の姿に戻りました。平成15年5月に新駅建設のために取り壊され、83年の歴史に幕を閉じました。

このシリーズも板橋を起点に、南町、本町、一部扇町等をご紹介します。さきましたが、今回は小田原駅周辺の懐かしい写真をご紹介します。

小田原の街角写真今昔 ⑤

(岡部忠夫先生アルバムより)

植田 士郎



2015年8月



1967年8月

次は、小田原駅東口から左斜め方向に錦通り商店街入口があります。ほぼ同じ場所を撮影したのですが、人通りの違いに驚かされます。



2015年8月



1965年3月

小田原駅からは少し外れますが、浜町の新玉小学校の今昔です。前身は小田原第三尋常高等小学校として昭和3年(1928)に開校。現在は鉄筋の2階建てで、校庭は全面芝生になっています。



2015年8月



1965年3月

最後は、新玉小学校近くのみゆき座の写真です。現在は大きなマンションになっていました。

小田原史談会セミナー「小田原を掘る」

要旨

第九回(小田原を掘る…第一回) 五月三十日

「旧石器・縄文時代」 講師 土屋 健作氏

(小田原市文化財課)

六万五千年前、箱根山大噴火の火砕流で形成された酒匂川右岸台地にある八幡山(小田原高校付近)、愛宕山(小田原駅西口付近北)は石材となる黒曜石を求めた旧石器時代の人々の痕跡があり、谷津山神(やまのかみ)遺跡には一万八千年前のまとまった資料が確認された。

市道布設の際、久野丘陵、特に一本松遺跡付近に縄文時代の環状集落が多く展開していることが発見された。

特筆されるべきは昨年旧城内高校跡に建設が始まった国際医療福祉大学校舎建設に伴い発掘し発見された縄文時代の墓域である。全国的にも重要な発見で、今年の十一月末にこの発掘成果を展示公開予定。

羽根尾貝塚は縄文前期、即ち縄文海進の頃の遺跡。土地が湿地帯であった為、土がいわば水パックされ有機質がそのまま残っている貴重な遺跡。縄の端(断面)を丹念に無数に押し付けた見事な土器(写真参照)が出土された。郷土文化館に展示されている。

御組長屋遺跡他には縄文後期の敷石住居跡もある。しかし縄文晩期の遺跡は何故か小田原には殆どない。



(松島記)

羽根尾貝塚で出土した開山式土器
(写真:小田原市文化財課蔵)

第十回(小田原を掘る…第二回) 八月二十九日

「弥生・古墳時代前期の小田原」

講師 土屋 了介氏

(小田原市文化財課)

弥生時代は灌漑施設を持つ水田稲作用などの土地開発、金属器の使用、武器の使用が始まり、環濠集落が現れた。二〇〇〇年代以後、「炭素14年代測定法」等の技術進歩で、弥生時代開始が従来より早かったこと、稲作だけでなく栽培植物・狩猟・漁撈・採取も重要であったことを明らかにした。

古墳時代前期(三世紀後半以降)に巨大古墳が登場し、技術が飛躍的に発展、広域的な王権が登場した。情報伝達も速くなり文化が先進地域から他地域に時間差なく入るようになった。

小田原の弥生時代(前六〇〇年頃)、足柄平野は御殿場泥流で覆われ、縄文時代晩期の遺跡が少なく、弥生時代を迎えるが、弥生時代前期は遺跡、土器の出土も少ない。

中期の中里遺跡は東日本最古の大規模農耕集落。地元で製作の須和田式、瀬戸内海東部・東海・甲信越・関東・南東北地方の土器が、また、大阪・奈良境の二上山や香川県で取れるサヌカイト(讃岐岩)の矢じりと石剣が出土し各地との交流があった。後続する中期後葉の羽根尾堰ノ上遺跡からはベンガラで赤く色付けした高坏や鳥形土器が出土した。

後期に東海地方や南関東など各地の様式の土器が作られている。鉄器や青銅製品が出土。鉄器は板の鉄を加工して作られた。

古墳時代前期、千代で円墳と前方後方墳、長さ六〇メートルの未確認の「大藪古墳」が、国府津三ツ俣などで方形周溝墓が造られた。永塚では玉作りが行われ、千代で鍛冶による鉄器が作られ、永塚と高田で銅鏡が出土した。(山口記)

キャンパスおだわら学習講座《公募型市民企画講座》

新シリーズ「小田原の歴史を掘る」開講 好評 第3回!

歴史講座 『小田原史談会セミナー』 第11回

日時:平成27年12月19日(土) 午前10時~12時

場所:小田原市民会館 5階 第3会議室

講座:『古墳時代(後)・奈良平安時代の小田原』

講師:小田原市文化財課学芸員

申込先:☎ 0465-33-1890 小田原市生涯学習センターけやきの会

定員・費用:50名 500円(資料代込)

—小田原史談会史跡めぐりのお知らせ—

詳しい内容・申し込みは別紙チラシを参照してください。

11月史跡めぐり

信州の鎌倉・別所温泉と上田城の史跡探訪

実施日 平成27年11月23日(月)～24日(火) 1泊2日
参加費 32,000円
参加人数 30名

1月史跡めぐり

武蔵国一宮氷川神社初詣と忍城・埼玉古墳群の散策

実施日 平成28年1月19日(火)
参加費 10,000円
参加人数 30名

小田原城の総構を歩く

五月二十二日(金)、小田原史談会五月研修会で、講師の杉山慶一さんと参加者九名で、小田原城総構を歩いた。

九時、小田原駅前集合し、まず、北条氏政・氏照の墓に立ち寄った。谷津から伸びた低い丘陵の端にある。因みに近くの竹ノ花という地名は、地理的には、岳の端(はな)で、その付近までなだらかな丘になっていたことを表しているという。

次に裏町(裏組)を通り井細田口に向かった。暫く荻窪方面に歩いて行き、荻窪口にある障子堀跡を見た。講師の話によると、障子の棧に当たる幅は1m弱で、堀の深さは2mぐらいのようだ。1mではやっと一人通れる幅で落ちれば一人では這い上がれない。防御としてはそれで十分であったように思われる。

その後、総構城下張出の堀と、さらに行った所にある平場を見た。暫く登ると茶畑があり、そこにも空堀があつて、昭和初期頃のこと、近所の子どもたちは、大雨の後、水遊びをしたと言う。

さらに、登って行くと山の神堀切(写真参照)があつたので、私は試みに、崖を勢いをつけて駆け上がって見たが、到底上まで行くのは困難だった。だから、戦国時代、胴丸を着け脇差を腰にし槍を

中條 利昭

持って駆け上がって戦うことは並大抵のことではないと想像できた。



山の神堀切

それからさらに登り、道を離れて脇道の奥に進み、稲荷森空堀に行つた。竹林に囲まれていてかなり深い空堀であつた。そこからやと、橋の方に降りて、御鐘ノ台大堀切東堀を歩いた。大木に囲まれた下道は、昼間なのに薄暗かつた。崖の上から鉄砲や矢を射られたら一たまりもない。明るい道に出ると遠く三ツ石が霞んで見えた。また、三の丸外郭新堀土塁からは箱根の外輪山がくつきりと眺望することができた。小田原城総構はうまく丘陵を使って構成されていることが、今回の研修会でさらに実感できた。

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

手打^{そうどん}小田原城趾前 田毎

税理士法人 **報徳会計**

のれんと味 **ぶる海**

伊勢治書店

茶半家具株式会社

 **かまぼこ**

ちんぎょう本店

(株) **オクツ薬局**

割烹料理^{うなぎ} **鳥かつ楼**

 **小田原ガス**

和菓子菜の花

小田原報徳自動車

杉崎茂法律事務所

かまぼこ籠 **清**


平井書店

かみやま小児科クリニック

株式会社 報徳

興電社

建築金物(株)星崎仲吉商店
家庭金物

創業四百年有餘
料理茶屋
 **小伊勢屋**

本多時計店

学生専科  **マルク**

COMTEC コムテック株式会社

曾我の梅干
塩辛・かまぼこ **美の政**

さがみ信用金庫

(株) **アルファ**

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十六年一月
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円
小田原史談会
〇〇二〇一三二八四三三六

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

若年寄の稲葉正休が大老堀田正俊を殿中で刺殺するという前代未聞の事件は正休の乱心で片付けられてしまう経緯を下重清さんが語ります。次号で真相が明らかになるのが楽しみです▼「花燃ゆ」は長州のお話、と思っていたら準主役の榎取素彦は明治のはじめ足柄県参事として小田原に赴任していたことを石井敬士さんに教わり、急にドラマを真面目に見るようになりました▼箱根神社にある吉田松陰と高須久子との交流を示す歌碑について直江博子さんが書いてくださいました▼喜寿を迎えた小田原市民は五十嵐写真館で記念写真を撮影して貰えます。その写真を四十年以上撮影して来られた五十嵐史郎さんが写真館百二十年の歴史を語ります▼明治維新に伴い大幅に減封された小田原藩主は寺院・神社への寄進を減額せざるを得ませんでした。寄進先が小田原・東京・京都・唐津・大阪等広域に及ぶこと、寄進の理由等を石井啓文さんが明らかにします▼江戸時代「他に類例の無い女舞」が何故桐座で可能だったのか、その女舞はどんなものだったのかを荒河純さんの論考で知ることが出来ます▼剣持芳枝さんは二十年間ほぼ休むことなく「旅のつれづれ俳句日記」他を投稿され、九月に卒寿を迎えられました。「書く事が好きなので」の言葉が印象的です。今後是非書続けて下さい。

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四一・二四

電話 〇四六五二・三三八六三五

松島俊樹